一般社団法人 日本独文学会

JAPANISCHE GESELLSCHAFT FÜR GERMANISTIK E.V.

ニュースレター2023 秋号

JGG-INFO-BLATT / HERBST 2023

2023/09/11 現在

まえがき

青天の霹靂

このたび 2023 年 6 月 3 日開催の理事会で会長に選出されました小黒です。選出はまさに青天の霹靂，事実，私は第 40 代会長であるばかりではなく，日本独文学会 76 年の歴史において首都圏以外から初めて選出された会長になります。思い返しますと，2015 年 1 月に機関誌 153 号特集編集責任者を仰せつかった後，引き続き文学・文化部門の編集責任者として 160 号までの編集に携わりました。編集委員会が関門海峡を越えて九州に置かれたことは初めてのことだったと伺っております。あまりにも荷が重かったので，2020 年 3 月の退任後，学会でのお役目はこれで十分に果たしたと思っておりました。それだけに，会長に選出されましたことは本当に驚きだったのです。ここではそんな私が 7 月 22 日の新理事会冒頭で述べましたことをお伝えさせていただきます。

余人をもって代え難し

当方，理事として企画や機関誌の経験はありますが，学会の実務にあまり通じていません。それだけに「脇を固めろ」という内なる声が聞こえてきたような気がしました。それで，庶務理事を選ぶ際，清野智昭さんと小林和貴子さんにまずはお願いした次第です。会長選挙の決選投票まで候補者としてお残りになられたお二人には，会員の「民意」が反映されています。しかも，清野さんは法人化の経緯を知っている経験豊富な元会長ですし，小林さんはこれまでの議論に通じている前理事会メンバーです。また，太田達也さんも川島建太郎さんも理事会経験が豊富であるばかりではなく，私にとって苦楽を共にできる仲間です。皆さんのご快諾に心より感謝しております。余人をもって代え難し，そんな思いでこの四人に重責をお願いしました。

Klein, aber fein

私は西日本支部と北海道支部の会員でもありますので，地方の視点も踏まえて会長職を考え続けているところです。西日本支部は，1999 年にアジア地区ゲルマニスト会議を引き受けた頃から，元気があるとよく言われます。勿論，西日本支部でも会員は減少傾向です。しかし，却って結束が固まり，逆に元気になっているような気がします。理由はいくつかありますが，それは別の機会に話すとし，ここでは一つの逸話を紹介させてください。私が支部選出理事だったとき，学会懇親会について縮小や廃止の意見が理事会で相次ぎました。この事を支部幹事会で伝えたところ，複数の方々が言われたのです。「支部ではたとえ研究発表がなくても懇親会だけはきちんとやりましょう」と。会員の減少を逆転の発想で考えることはできないでしょうか。私はそう考えております。

血行の良い学会

もっとも言うは易く行うは難しです。前理事会は学会活動のスリム化を基本方針とされました。持続可能な学会のためにも，そうしたご対応をしっかりと受け継いでいきます。同時に，コロナ禍で学会運営を行った前理事会とは異なり，新理事会は対面での活動が復活する状況に対応していかなければなりません。加えて，多々ある課題の中でも，支部の活性化とハラスメント宣言の実行化は特に重要です。いずれもしっかりと取り組まなければ，身体論的に言いますと，学会全体の血行が悪くなり，学会の身体機能も一挙に低下してしまいます。特にハラスメントに関しては，前理事会が出された防止宣言を，単なる宣言にならないようにしなければなりません。問題発言があればその場で皆が指摘し合える雰囲気を作っていきたいと思っています。

ご助言とエール

なお，前会長の井出万秀さんには会長引き継ぎの際に色々とご教示をいただきました。最後になりましたが，この場をお借りしまして御礼を申し上げます。また，旧理事会の皆さん，コロナ禍での２年間，本当にご苦労様でした。皆さんの献身的な活動をしっかりと受け継いでいきます。また，私事になりますが，この間，福岡で保阪靖人さんとベルリーンで粂川麻里生さんとそれぞれお会いする機会がありました。私自身が会長職の重責にかなり戸惑っていた時だったので，日本独文学会の活動に精通するお二人からご助言とエールを受け取ることができ，本当に良かったです。有難うございました。皆さんの思いをしっかりと受け止めながら，血行の良い学会運営を実践し，一致協力して持続可能な学会を目指していきたいと思っています。

会長　小黒康正

目次

まえがき	2
2023 年秋季研究発表会について / Herbsttagung 2023	5
2023 年秋季研究発表会における託児サービスについて	6
Kindertagesstätte während der Herbsttagung 2023	7
2024 年春季研究発表会のご案内	8
Bekanntmachung der Frühlingstagung 2024	9
研究会開催のための会場借用について	10
Zur Beantragung der Raumbenutzung bei der JGG-Frühlingstagung 2024	11
学会当日の受付用机・椅子の借用について	12
Zur Beantragung von Infotischen auf der JGG-Frühlingstagung 2023	13
第 22 回日本独文学会・DAAD 賞選考への応募について	14
第 63 回ドイツ文化ゼミナール開催のご案内	17
第 28 回ドイツ語研究教育ゼミナールについて	23
2023 年度ドイツ語論文執筆ワークショップについて	24
DAAD からのお知らせ	25
ゲーテ・インスティトゥート奨学金のお知らせ	27
会費納入について	29
一般社団法人日本独文学会会費規程	30
第 20 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告（日本語部門）	32
第 20 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告（ドイツ語部門）	33
日本独文学会 2023 年総会・春季研究発表会報告	37
2022 年度ドイツ文化ゼミナール報告	39
第 27 回ドイツ語教授法ゼミナール報告	45
2022 年度ドイツ語教員養成・研修講座報告	50
日本独文学会研究叢書新刊のご案内	52
支部報告	53
ドイツ語教育部会報告	59
2023 年度岩﨑奨学金（出版助成）について	62
大学院 Germanistik 関係博士論文題目	64
あとがき	65

2023 年秋季研究発表会について

2023 年の秋季研究発表会は，京都支部の担当で，10 月 14 日（土），15 日（日）に京都府立大学下鴨キャンパスにて対面で開催されることになった。シンポジウム 4 本，口頭発表 15 本，ブース発表 2 本，ポスター発表 1 本が予定されている。参加費は，会員 1,000 円，学生会員 500 円，非会員（含む学生）1,500 円となり，事前振込をお願いする形になる。事前振込の要領，プログラム等の詳細については，学会 HP「日本独文学会ホームページ（https://www.jgg.jp/）左メニュー「研究発表会」にてお知らせする。

Herbsttagung 2023

Die Herbsttagung der Japanischen Gesellschaft für Germanistik e. V. findet am 14. (Sa.) und 15. (So.) Oktober 2023 an der Kyoto Präfekturuniversität (Shimogamo-Campus) statt. Es gibt 4 Symposien, 15 Vorträge, 2 Kabinen-Präsentationen und 1 Poster-Präsentation.

Teilnahmegebühr:

– JGG-Mitglieder	1.000 Yen,
– JGG-Mitglieder (Studierende)	500 Yen,
– Nicht-Mitglieder (inkl. Studierenden)	1.500 Yen.

Die Teilnahmegebühr ist im Voraus zu überweisen. Näheres über die Überweisung und das Programm der Tagung finden Sie unter Tagungen im linken Menü auf der JGG-Webseite (https://www.jgg.jp/).

（企画担当）

2023 年秋季研究発表会における託児サービスについて

10 月 14 日，15 日の両日，京都府立大学を会場として開催される「日本独文学会 2023 年度秋季研究発表会」に際し，託児サービスを提供します。

託児期間： 10 月 14 日（土）午後 0 時 30 分から午後 6 時まで
10 月 15 日（日）午前 9 時 30 分から午後 1 時 30 分まで
託児場所： 京都府立大学　合同講義棟 3 階第 6 講義室
託児費用： 登録料として一会員あたり 1,000 円（複数人数・複数日一律）
対象年齢： 生後 57 日後から小学校 3 年生まで

託児は,「株式会社 SSF」という業者に委託して行います。詳細は申込者に直接連絡いたします。

申込締切： 9 月 29 日（金）
申込先： kinder23@jgg.jp

なお，申し込みに際しては下記の事項をお知らせください。

1. 申込者の氏名・住所・連絡先
2. 託児希望のお子様の人数・お名前・年齢・性別
3. 託児を希望する日時
4. アレルギー等特記事項

Kindertagesstätte während der Herbsttagung 2023

Anlässlich der Herbsttagung der JGG am 14. und 15. Oktober an der Kyoto Präfekturuniversität wird die Kindertagesstätte unter folgenden Bedingungen angeboten:

Zeit:	Samstag, 14. Oktober von 12.30 Uhr bis 18.00 Uhr
	Sonntag, 15. Oktober von 9.30 bis 13.30 Uhr
Ort:	Godo-Kogi-To (Hauptgebäude), 3. Stock, Raum 6
Kosten:	1.000 Yen pro Mitglied
	(Pauschalbetrag für mehrere Kinder sowie mehrere Tage)
Alter	Ab 57 Tagen nach der Geburt bis zur dritten Klasse der Grundschule

Die Kinderbetreuung wird von der Firma namens „SSF“ angeboten. Das Nähere wird dem angemeldeten Mitglied direkt mitgeteilt.

Anmeldungsfrist:	29. September (Freitag)
Anmeldung:	kinder23@jgg.jp

Geben Sie bitte bei der Anmeldung folgende Informationen an:

1. Name, Anschrift und Kontaktadresse der/s Anmelder*in
2. Anzahl der Kinder, die zu betreuen sind, deren Namen, Alter und Geschlecht
3. Datum und Uhrzeit der gewünschten Betreuung
4. Allergien und andere besondere Hinweise

2024 年春季研究発表会のご案内

下記の通り，2024 年春季研究発表会を開催いたします。

期日： 2024 年 6 月 8 日（土），9 日（日）　（変更の可能性あり）
会 場：慶應義塾大学日吉キャンパス
〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4 丁目 1−1
https://www.keio.ac.jp/ja/maps/hiyoshi.htmll

研究発表をご希望の方は「発表申込書１（申込者情報）」（Excel 形式）をダウンロードし，「発表申込書２（発表概要）」（Word 形式）と共に，日本独文学会ホームページ（https://www.jgg.jp/）左メニュー「研究発表申し込み」にアクセスし，「発表申し込みフォーム」よりお申込みください。その際，必ず「研究発表申し込み要領（2020 年 2 月 1 日改訂）」をご熟読ください。申し込み審査のガイドラインもそこに記載されています。

申し込み締め切り：**2023 年 12 月 3 日（日）**
申し込み先：**上記発表申し込みフォーム**

2023 年 9 月
日本独文学会理事会

Bekanntmachung der Frühlingstagung 2024

Die Frühlingstagung der JGG findet statt:

am Sa., 8. und So., 9. Juni 2024 (Änderungen vorbehalten)
an der Keio Universität, Hiyoshi-Campus
Hiyoshi 4-1-1, Kohoku-ku, Yokohama, 223-8521 Kanagawa, Japan
https://www.keio.ac.jp/ja/maps/hiyoshi.html

Wenn Sie sich als Referent*in bewerben möchten, senden Sie uns bitte das ausgefüllte Antragsformular (Excel-Datei) und Ihr Exposé in Form einer selbst verfassten Word-Datei. Um sich anzumelden laden Sie bitte beides unter Anmeldeformular (発表申し込みフォーム) auf der JGG-Webseite hoch.

Detaillierte Informationen sowie alle notwendigen Upload- und Download-Links finden Sie unter Referatsanträge im linken Menü auf der JGG-Webseite (https://www.jgg.jp/). Der deutsche Text folgt dem japanischen.

Anmeldefrist: **So., 3. Dezember 2023**
Anmeldung unter: siehe oben

September 2023
Vorstand der JGG

研究会開催のための会場借用について

2024 年春季研究発表会の折に研究会開催のための会場の借用をご希望の場合は，下記の要領でお申し込みくださいますようお願いいたします。

記

１）申し込み方法
必要事項をご記入のうえ，　学会ホームページ上(**https://www.jgg.jp/**)「研究会開催のための会場借用申し込み」フォームよりお申し込みください。 なお，会場および開催形式の関係で，すべてのご希望には添えない場合がございます。

申し込み期限：2024 年 1 月 7 日（日）

２）会場借用の時間帯
借用可能な時間帯は，学会 2 日目の午後 13 時 30 分から 16 時までです。

３）会場使用料
教室の使用に際しましては会場校が定める一定の使用料をいただくことになります。料金については，使用教室のご案内とともに，日本独文学会事務局より開催約 1 ヶ月前にお知らせします。

◎ 商行為を行うことはできません。
◎ 詳細は研究会責任者にご連絡いたします。

2023 年 9 月
日本独文学会理事会

Zur Beantragung der Raumbenutzung bei der JGG-Frühlingstagung 2024

Vereinen oder Arbeitsgruppen der JGG kann auf Wunsch bei der JGG-Frühlingstagung 2024 ein Raum zur Verfügung gestellt werden. Bei Interesse melden Sie sich bitte rechtzeitig im Büro der JGG! Aus Gründen der begrenzten Anzahl der zur Verfügung gestellten Räume und je nach Gegebenheiten des Veranstaltungsortes können unter Umständen nicht alle Wünsche berücksichtigt werden oder es kann Einschränkungen geben. Bei der Raumbenutzung muss der Antragsteller mit entstehenden Kosten rechnen.

Anmeldefrist: So., 7. Januar 2024

Das Anmeldeformular finden Sie auf der JGG-Webseite (https://www.jgg.jp/) bei **Tagungen** unter dem Punkt **Zur Beantragung der Raumbenutzung bei der JGG-Frühlingstagung**.
Die Raumbenutzung ist am zweiten Tag der Tagung, von 13.30 Uhr bis 16 Uhr möglich.

Bitte beachten Sie:
- Geschäftliche Transaktionen sind nicht gestattet.
- Sie werden nach Bearbeitung Ihres Antrags etwa einen Monat vor Tagungsbeginn über Einzelheiten wie z. B. Informationen zu den Räumen und entstehende Gebühren benachrichtigt.

September 2023
Vorstand der JGG

学会当日の受付用机・椅子の借用について

2024 年春季研究発表会の会場において，受付用に机・椅子の借用をご希望の場合は，下記の要領でお申し込みくださるようお願いいたします。なお，会場および開催形式の関係で，すべてのご希望には添えない場合がございます。

記

申し込み方法
学会ホームページ上の「学会当日の受付用机・椅子の借用申し込み」フォームよりお申込みください。

申し込み期限：**2024 年 1 月 7 日（日）**

◎ 商行為を行うことはできません。
◎ 詳細は団体・研究会の責任者にご連絡いたします。

2023 年 9 月
日本独文学会理事会

Zur Beantragung von Infotischen auf der JGG-Frühlingstagung 2024

Vereine oder Arbeitsgruppen der JGG können auf der JGG-Frühlingstagung 2024 einen Infostand (mit Stühlen) aufstellen. Bei Interesse melden Sie sich bitte rechtzeitig im Büro der JGG! Aus Platzgründen und je nach Gegebenheiten des Veranstaltungsortes können unter Umständen nicht alle Wünsche berücksichtigt werden oder es kann Einschränkungen geben.

Anmeldefrist: So., 7. Januar 2024

Das Anmeldeformular finden Sie im linken Menü auf der JGG-Webseite (https://www.jgg.jp/) bei **Tagungen** unter dem Punkt **Zur Beantragung von Infotischen auf der JGG-Frühlingstagung**.

Bitte beachten Sie:

- Geschäftliche Transaktionen sind nicht gestattet.
- Nach Bearbeitung der Anmeldung wird der Antragsteller über die Einzelheiten benachrichtigt.

September 2023
Vorstand der JGG

第 22 回日本独文学会・DAAD 賞選考への応募について

第 22 回日本独文学会賞の選考対象業績を下記の要領により募集します。ふるってご応募ください。

記

1　選考対象

日本独文学会員が執筆し，2023 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までに刊行ないし印刷公表されたドイツ文学，ドイツ語学，ドイツ語教育，ドイツ語圏の文化・社会等に関する研究書および論文。自薦，他薦は問わない。なお，日本独文学会機関誌に掲載の論文は自動的に選考の対象となる。

2　部門と選考

次の部門ごとに設けられた選考委員会が，選考にあたる。

日本語研究書部門
ドイツ語研究書部門
日本語論文部門
ドイツ語論文部門

3　年齢制限

日本語研究書部門およびドイツ語研究書部門では特に年齢制限を設けないが，日本語論文部門およびドイツ語論文部門についてはドイツ語学文学振興会賞との重複を避けるため，論文の印刷公表年の 12 月 31 日現在で 36 歳以上の執筆者の論文に限る。

4　応募方法

当該の研究書または論文の原本 1 部を，論文の場合は執筆者の生年月日を明記の上（他薦の場合で生年月日が不明なら，その旨を記すこと）下記宛てに 2024 年 3 月 31 日までに送付する。封筒には「学会賞応募」と朱書すること。

日本独文学会
〒170−0005　東京都豊島区南大塚 3−34−6−603
Tel:03-5950-1147

5　選考結果の発表

2024 年度末頃に学会ホームページで公表する。

6　授賞件数

日本語研究書部門・ドイツ語研究書部門：それぞれ 1 件程度
日本語論文部門・ドイツ語論文部門：それぞれ 2 件程度

7　授賞式

授賞式において，受賞者に賞状と副賞を授与する。授賞式は 2025 年春季研究発表会において行う。

Hiermit kündigt die japanische Gesellschaft für Germanistik (JGG), die sich für die Verbreitung und Erforschung der deutschen Sprache und Literatur einsetzt, ihre Ausschreibung für die 22. JGG-DAAD-Preise an.

1. Auswahlkriterien:

1) Bei den Beiträgen muss es sich um Arbeiten von Mitgliedern der Japanischen Gesellschaft für Germanistik handeln.
2) Die Veröffentlichung der betreffenden Beiträge muss im Zeitraum vom 01.01.2023 bis zum 31.12.2023 erfolgt sein.
3) Beiträge, die in der Reihe „Neue Beiträge für Germanistik“ (Doitsu Bungaku) veröffentlicht wurden, werden automatisch nominiert. Weitere Nominierungsmöglichkeiten bestehen durch Selbstempfehlung oder durch die Empfehlung anderer.

2. Preiskategorien:

1) Wissenschaftliche Arbeiten in Buchform in japanischer Sprache.
2) Wissenschaftliche Arbeiten in Buchform in deutscher Sprache.
3) Wissenschaftliche Aufsätze in japanischer Sprache.
4) Wissenschaftliche Aufsätze in deutscher Sprache.

Für jede der oben genannten vier Preiskategorien wird ein Auswahlkomitee eingesetzt.

3. Altersbegrenzung:

Für Verfasser/Verfasserinnen von Beiträgen in Buchform besteht keine Altersbegrenzung. Verfasser/Verfasserinnen von Beiträgen in Aufsatzform (Kategorie 3 und 4) müssen am 31. Dezember des Veröffentlichungsjahres das 36. Lebensjahr vollendet haben.

4. Einsendebedingungen:

Ein Exemplar des wissenschaftlichen Aufsatzes bzw. ein Exemplar der wissenschaftlichen Arbeit in Buchform muss bis zum 31.3. 2024 an die folgende Adresse eingesandt werden:

Japanische Gesellschaft für Germanistik (Nihon Dokubun Gakkai);
Minamiotsuka 3-34-6-603, 170-0005 Tokyo.

Auf Zettel soll das Geburtsdatum des Verfassers/der Verfasserin des Beitrags im Aufsatzform notiert und auf dem Briefumschlag soll rot der Betreff „Bewerbung für JGG-DAAD-Preise“ vermerkt sein.

5. Bekanntgabe der Entscheidung:
Ende des Geschäftsjahres 2024 wird die Entscheidung über die Preisvergabe auf der JGG-Homepage bekannt gegeben.

6. Zahl der jährlichen Preisvergaben:
Es ist davon auszugehen, dass normalerweise jährlich in den Kategorien 1 und 2 jeweils ein Preis, in den Kategorien 3 und 4 dagegen zwei Preise verliehen werden.

7. Preisverleihung:
Die Preisträger erhalten eine Urkunde sowie ein Preisgeld. Die Preisvergabe findet nach der Bekanntgabe der Entscheidung im Rahmen der Frühlingstagung der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 2025 statt.

第 63 回ドイツ文化ゼミナール開催のご案内

第 63 回ドイツ文化ゼミナールをドイツ学術交流会（DAAD）との共催で，下記のとおり開催いたします。発表・討議はドイツ語で行います。

今回実施予定のドイツ文化ゼミナールでも，昨年に引き続き COVID-19 の感染を避けるため，合宿での開催は避け，神奈川県横浜市（慶應義塾大学・日吉キャンパスを予定）での連続ゼミナール（５日間）という形で行います。

＊ただし，ご希望の方には会場内の宿泊施設を仲介させていただくことも可能です。

皆さまのご参加をお待ちしております。

記

テーマ：Formen der Natur – Formen der Kultur. Ihre Bestimmung und Transformation von der Goethezeit bis in die Gegenwart
（詳細は下記の Themenbeschreibung を参照）
招待講師：エーファ・ゴイレン教授（ベルリン・ライプニッツ文化・文学研究所所長）
会期：2024 年 3 月 13 日（水）－17 日（日）
会場：慶應義塾大学（日吉キャンパス）
参加費：10,000 円(学生・院生・非常勤職の方には宿泊費補助があります)
定員：60 名
申込締切： 2023 年 10 月 31 日（火）
参加ご希望の方は 2023 年 10 月 31 日（火）までに，オンラインか葉書で日本独文学会にお申し込みください。
1. オンラインの場合 ⇒ https://forms.gle/hNaWHHY4wqt1gkKCA
からお申し込みください。
2. 葉書の場合：裏面に「文化ゼミ参加希望」と朱書の上，氏名，所属機関，現職（参加費補助の関係上，学生・院生および常勤職のない方はその旨を明記），住所（漢字・ローマ字併記），電話番号、メールアドレスを次の宛先にご送付ください：
〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6 南大塚エースビル 603 日本独文学会
日本独文学会会員以外の方が申し込む際は，上記のオンラインフォームで申し込んだのちに，実行委員会（kulturseminar24tn@googlegroups.com）まで略歴，参加希望理由（独文 150 語程度），業績リスト（研究業績がある方）をご提出ください。
非学会員の参加費は 12,000 円です。

なお，参加は原則として申し込み順に受け付けますが，最終的な決定は理事会にお任せください。
研究発表について：ドイツ語による 30 分程度の発表を希望される方は，題目および要旨（独文 400 語以内）に簡単な履歴を添えて，2023 年 10 月 31 日（火）までに実行委員会（kulturseminar24tn@googlegroups.com）までお申し出ください。なお，発表者の決定は実行委員会に御一任願います。
（ご希望の方には，会場に隣接する宿泊施設をご紹介することが可能です。それにつきましては，お申込み後にあらためてお知らせ申し上げます。）
日本独文学会・ドイツ文化ゼミナール実行委員会
Andreas Becker，石橋奈智，茅野大樹，大田浩司，北川千香子，粂川麻里生（委員長），　久山雄甫，高橋優，橘宏亮，二藤拓人，柳橋大輔，Markus Joch
＊実行委員会は，すべての参加者に快適な学会滞在と，実りある学術的な議論を可能にする生産的な研究環境を整えるために努力します。これらはいうまでもなく参加者相互の敬意と信頼の上に成り立つものです。文化ゼミナールはそれゆえ，いかなる言葉による嫌がらせも，性的ハラスメントも，参加者個人の人格を毀損するような言動も許しません。

Ankündigung des 63. Kulturseminars
In Zusammenarbeit mit dem DAAD veranstaltet die Japanische Gesellschaft für Germanistik (JGG) vom 13. bis 17. März 2024 ihr 63. Kulturseminar. Vorträge werden auf Deutsch gehalten, und auch die Diskussionen werden in deutscher Sprache geführt.
Weil wir im Hinblick auf die Übertragung von COVID-19 noch vorsichtig sein möchten, werden wir auf eine gemeinsame Unterbringung verzichten. Deshalb wird die Veranstaltung wie beim letzten Kulturseminar in Form einer fünftägigen Seminarreihe in Yokohama stattfinden.

(Wenn Sie es wünschen, können wir Ihnen jedoch eine Unterkunft am Veranstaltungsort vermitteln.)

Alle interessierten Mitglieder der JGG dürfen sich herzlich eingeladen fühlen.
Rahmenthema: Formen der Natur – Formen der Kultur. Ihre Bestimmung und Transformation von der Goethezeit bis in die Gegenwart
(s. u. die Themenbeschreibung)
Gastdozent: Prof. Dr. Eva Geulen (Leibniz-Zentrum für Kultur- und Literaturforschung)
Datum: Mi., 13. März – So., 17. März 2024
Ort:　Keio Universität, Hiyoshi Campus (Yokohama)
Teilnahmegebühr: 10.000 Yen
(Student*innen, Doktorand*innen und teilzeitbeschäftigte Teilnehmer*innen ohne feste Anstellung können einen Zuschuss beantragen. Bitte teilen Sie uns ausdrücklich mit, wenn

dies für Sie zutrifft.)
Erwartete Teilnehmerzahl: ca. 60
Anmeldeschluss: 31. Oktober 2023
Anmeldung (JGG-Mitglied): Melden Sie sich bitte online auf dieser Webseite an:
https://forms.gle/8zUgi2MHLkzRMHHi9
Eine Anmeldung per Post ist auch möglich. Senden Sie bitte eine Postkarte mit dem roten Vermerk „ANMELDUNG KULTURSEMINAR“ und Ihren persönlichen Daten (Name, Institution, berufliche Position, Anschrift, Telefonnummer, E-Mail-Adresse) an die Anschrift:
Japanische Gesellschaft für Germanistik Minami Otsuka 3-34-6-603 Toshima-ku,
170-0005 Tokyo
Anmeldung (Mitglied eines germanistischen Verbandes in China, Korea und Taiwan): Melden Sie sich bitte online auf dieser Website an:
https://forms.gle/8zUgi2MHLkzRMHHi9
Senden Sie bitte außerdem den akademischen Werdegang und eine Liste der wichtigsten Publikationen an das Organisationskomitee (kulturseminar24tn@googlegroups.com). Die Teilnahmegebühr für Mitglieder der genannten Verbände aus diesen Ländern entspricht der Summe, die auch JGG-Mitglieder entrichten: 10.000 Yen.
Anmeldung (kein JGG-Mitglied und kein Mitglied eines germanistischen Verbandes in China, Korea und Taiwan): Melden Sie sich bitte online auf dieser Website an:
https://forms.gle/8zUgi2MHLkzRMHHi9
Senden Sie bitte außerdem den akademischen Werdegang, eine Liste der wichtigsten Publikationen (wenn vorhanden) und ein Motivationsschreiben (ca. 150 Wörter) an das Organisationskomitee (kulturseminar24tn@googlegroups.com). Die Teilnahmegebühr beträgt 12.000 Yen.
Da die Teilnehmerzahl begrenzt ist, werden die Anmeldungen in der Reihenfolge ihres Eingangs berücksichtigt. Die endgültige Entscheidung über die Teilnahme behält sich der Vorstand der JGG vor.
Call for Abstracts: Das Seminar bietet die Gelegenheit zur Präsentation von Vorträgen zum Rahmenthema (ca. 30 Min.). Bitte schicken Sie bis zum 31. Oktober 2023 Ihren Titel, Ihr Resümee (max. 400 Wörter) und Ihre Kurzvita an das Organisationskomitee (kulturseminar24tn@googlegroups.com)
Das Komitee behält sich vor, wenn nötig, aus den eingereichten Exposés eine Auswahl zu treffen.
(Wenn Sie es wünschen, können wir Ihnen eine Unterkunft in der Nähe des Veranstaltungsortes vermitteln. Wir werden Sie nach Ihrer Anmeldung erneut darüber informieren.)
Organisationskomitee des 63. Kulturseminars
Andreas Becker, Nachi Ishibashi, Hiroki Chino, Yuho Hisayama, Chikako Kitagawa, Mario Kumekawa (Vorsitzender), Takuto Nito, Koji Ota, Hirosuke Tachibana, Yu Takahashi,

Daisuke Yanagibashi, Markus Joch

Das Organisationskomitee bemüht sich um die Gewährleistung produktiver Arbeitsbedingungen, die allen Teilnehmer*innen einen angenehmen Aufenthalt auf der Tagung und ertragreiche wissenschaftliche Diskussionen ermöglichen. Diese basieren freilich ganz entscheidend auf gegenseitigem Respekt und Vertrauen. Nicht geduldet in unserem Kulturseminar werden daher verbale und sexuelle Belästigungen, überhaupt ein jegliches Verhalten, das gegen die Persönlichkeitsrechte einer Teilnehmerin oder eines Teilnehmers verstößt.

****

Themenbeschreibung

Formen der Natur – Formen der Kultur
Ihre Bestimmung und Transformation von der Goethezeit bis in die Gegenwart

Im Kulturseminar 2024 möchten wir literarische und theoretische Texte lesend über die Beziehung zwischen Natur und Kultur aus verschiedenen Blickwinkeln diskutieren, wobei wir den Begriff der „Form“ als Anhaltspunkt nehmen: „Ihren jüngsten Aktualisierungsschub erfuhr die Morphologie durch das in den vergangenen Jahrzehnten international wachsende Interesse der Geistes- und Kulturwissenschaften am Begriff und Problem von Form und Transformation.“ (Geulen, Axer, Heimes 2022)

Die Kultur des Menschen steht weltweit an einem Wendepunkt und das Verhältnis zwischen Natur und Kultur muss erneut bestimmt werden. In den letzten Jahren wurde eine Reihe von Schlagwörtern vorgeschlagen, um den Wendepunkt der Zivilisation zu diskutieren: Anthropozän, Singularität, Posthuman usw. Es ist jedoch nicht einfach, die wissenschaftlichen Voraussetzungen für solche Diskussionen klar zu machen. Einerseits optimieren die Technologien, die auf den modernen Naturwissenschaften basieren, unser Leben immer mehr und beherrschen uns, indem sie als Rahmen für unsere Weltauffassung dienen. Andererseits entwickeln die digitalen Technologien sich weiter und machen sogar die Grenze zwischen Realität und Virtualität unsicher und erschüttern unsere Weltansichten. Die Welt kann dabei als eine Überlagerung sich selbst reflektierender Systeme, die je nach dem Organ und dem System der Vorstellung und Sprache unterschiedlich wahrgenommen werden sollen, verstanden werden. Interessanterweise haben die deutschen Intellektuellen des späten 18. Jahrhunderts eine ähnliche Erschütterung ihres Weltbildes erfahren und mit ihren Mitteln versucht, damit umzugehen und diesen Prozess zu verstehen. Goethe z. B. versuchte bekanntlich in seiner Morphologie und Farbenlehre die Symbolik der Natur zu erforschen, in der jede Form und jede Farbe als Sprache der Natur als ganzer verstanden werden sollte. Eine solche goetheanische Naturforschung wurde jedoch von der modernen Naturwissenschaft meistens abgelehnt.

Denn ihre Denkmethode beruhte auf anderen Prinzipien als denen der Naturwissenschaft. Sie hat dann aber z. B. in der Philosophie, der Psychologie, der Psychotherapie oder auch in der Physiologie eine wichtige Rolle gespielt. Heute kann man in der phänomenologischen, anthropologischen oder ethnographischen Forschung häufig Beispiele dafür finden. Dabei betrachtet man die Welt nicht nur bipolar im Sinne eines Subjekts, das dem Objekt gegenübersteht, sondern auch als einen Komplex vieler verschiedener Formen und Oberflächen. In der interkulturellen Tradition Ostasiens, wo man sich die Gegensätze wie Natur-Kultur oder Form-Inhalt oder Subjekt-Objekt anders als in Europa vorstellen könnte, gibt es auch Ansätze, die Goethes Naturanschauung ähneln. In diesem Seminar möchten wir auf diese Weise dem Verhältnis von Natur und Kultur aus verschiedenen Perspektiven nachgehen.

Frau Prof. Eva Geulen, Gastdozentin des Kulturseminars 2024, erforscht diese Themen seit vielen Jahren: „Die Entdeckung der Aufklärung, dass mehr als eine Welt ist, war von Kant erkenntnistheoretisch so fundiert worden, dass der Mensch zu einem hybriden Wesen wurde, das mit einem Bein in der Natur als dem Reich der Notwendigkeit steht und mit dem anderen im Bereich der Kultur und der Freiheit. Der korrespondierende Subjekt-Objekt-Dualismus und die mit ihm verbundene Leitdifferenz Natur vs. Kultur spaltet seither auch die Welt in Natur- und Kulturgegenstände, denen verschiedene und letztlich nicht vermittelbare Erkenntnisformen korrespondieren.“ (Geulen, Haas 2022)

Die Arbeit von Frau Geulen als Leitfaden betrachtend, möchten wir in diesem Seminar anhand von literarischen und wissenschaftlichen Texten in Vorträgen und Gruppenarbeit diskutieren, wie man heute über Natur und Kultur sprechen und deren Relation neu bestimmen kann.

【Schwerpunkte des Tages】

1. Naturwissenschaft und die Beschreibung der Welt
2. Klassik und Metamorphose
3. Natur und/oder Kultur?
4. Nach der Menschheit

Im Programm werden vier Schwerpunkte aufgestellt: Zunächst soll in „Naturwissenschaft und die Beschreibung der Welt“ darüber diskutiert werden, welches Weltbild von der modernen Naturwissenschaft präfiguriert wurde und welche Probleme dadurch verursacht wurden. Als nächstes wird in „Klassik und Metamorphose“ diskutiert, wie man den Begriff der „Klassik“ konturieren kann und welche Metamorphosen als Variationen dieses kulturellen „Urtyps“ entstehen können. In „Natur und/oder Kultur?“ soll untersucht werden, wo die Grenzen zwischen der „Natur“ und der menschlichen „Kultur“ gezogen werden

sollten und welche Verhältnisse zwischen Natur und Kultur bestehen. Unter dem letzten Thema „Nach der Menschheit“ wird nach den vorangehenden Diskussionen weiter über die Vorstellung des „Menschen“ diskutiert. Wenn das Bild des „Menschen“ mehr oder weniger erschüttert wird, wie beim Begriff „post-human“ oder „Antropozän“, dann muss darüber diskutiert werden, wie sich der Mensch heute verstehen sollte. Durch die Diskussionen über diese vier Themen wollen wir versuchen, die „Goetheanische Tradition“ neu zu erfassen und eine Orientierung zu finden, die sowohl Natur als auch Kultur berücksichtigt.

第 28 回ドイツ語教育研究ゼミナールについて

第 28 回ドイツ語教育研究ゼミナール(「ドイツ語教授法ゼミナール」より改称)は，2024 年 3 月に開催する予定である。詳細が決まり次第，学会ホームページにて告知し，参加者募集を開始する。

Zum 28. DaF-Seminar der JGG

Das 28. DaF-Seminar wird voraussichtlich im März 2024 stattfinden. Sobald Näheres feststeht, werden die Informationen auf der Homepage der JGG bekannt gegeben.

（文責：草本晶）

2023 年度ドイツ語論文執筆ワークショップについて

開催の有無を含め，詳細は後日，日本独文学会ホームページ上で発表いたします。

DAAD からのお知らせ

1. 2024 年度 DAAD 奨学金ウェブサイト更新のお知らせ

ドイツでの留学・研究のための奨学金である DAAD 奨学金に関する情報をウェブサイトにて更新いたしました。
今回の応募では例年と異なる点が多く存在するため，2024 年度の応募を考えている方は，必ず奨学金ページ上部のグレーの Box 内記載の注意事項をよくご確認ください。
奨学金についてのお問い合わせは，scholarships@daadjp.com までメールにてお送りください。お問い合わせに回答を差し上げるまでに少々時間を頂いておりますが，ご了承いただければ幸いです。
詳細：www.daad.jp/scholarships

2. ドイツ留学オンライン説明会：2024 年度 DAAD 奨学金について

先日ウェブサイトで情報が更新された 2024 年度 DAAD 奨学金について，DAAD 東京事務所のスタッフが各プログラムの概要や昨年からの変更点，注意事項などをご説明いたします。YouTube のコメント機能を使って，気になる質問をライブで投稿することも可能です。2024 年度の応募を考えている方はぜひご視聴ください。
日時：2023 年 9 月 22 日（金）18:00～19:00
場所：オンライン（YouTube ライブでの配信）
イベントの言語：日本語
参加登録：不要（どなたでもご視聴いただけます）
視聴リンク：https://youtube.com/live/DBRbjSXR2KI

3. ドイツ留学相談随時受付中

DAAD 東京事務所はドイツ留学に関する相談を随時受け付けています。メール・電話の他，Zoom によるオンラインでの相談も可能です。ドイツ留学相談をご希望の方は，お問い合わせフォームから具体的な質問内容をお送り下さい。オンライン相談をご希望の場合は「オンライン留学相談希望」と記載し，ご希望の日時（一人当たり約 20 分，事務所開室日 14～17 時まで）をあらかじめお知らせください。
お問い合わせフォーム：www.daad.jp/ja/about-us/contact/

1. DAAD-Stipendienprogramme für das Jahr 2024

Die Informationen zu den DAAD-Stipendienprogrammen für Studium und Forschung in Deutschland wurden auf der Website der DAAD-Außenstelle Tokyo aktualisiert.
Da sich die Bewerbungsmodalitäten im Vergleich zum letzten Jahr geändert haben, bitten

wir Sie, die Hinweise im grauen Kasten oben auf der japanischen Stipendienseite sorgfältig zu lesen, wenn Sie sich für das Stipendienjahr 2024 bewerben möchten.
Bei Fragen zu den Stipendienprogrammen wenden Sie sich bitte per E-Mail an scholarships@daadjp.com. Bitte beachten Sie, dass die Beantwortung der Anfragen einige Zeit in Anspruch nehmen kann.
Weitere Informationen (auf Japanisch): www.daad.jp/scholarships

2. Online-Seminar zu den DAAD-Stipendienprogrammen 2024

Die DAAD-Außenstelle Tokyo stellt einen Überblick zur Verfügung über die einzelnen Programme, Änderungen gegenüber dem Vorjahr und Hinweise zur Bewerbung für die DAAD-Stipendienprogramme 2024, deren Informationen auf der Website aktualisiert wurden. Sie können auch die Kommentarfunktion von YouTube nutzen, um Ihre Fragen zu stellen. Es ist äußerst hilfreich, wenn Sie an unserem YouTube Live teilnehmen, wenn Sie sich für 2024 bewerben möchten.

Datum & Uhrzeit: Freitag, 22. September 2023, 18:00 – 19:00 JST
Ort: Online (YouTube-Live)
Veranstaltungssprache: Japanisch
Anmeldung: nicht nötig (Die Live-Übertragung ist frei zugänglich)
Link zu YouTube Live: https://youtube.com/live/DBRbjSXR2KI

3. Beratung zum Studium in Deutschland

Die DAAD-Außenstelle Tokyo steht jederzeit für Beratungen zum Studium in Deutschland zur Verfügung. Neben E-Mail- und Telefonberatung ist auch eine Online-Beratung über Zoom möglich. Wenn Sie eine Beratung zum Studium in Deutschland wünschen, senden Sie uns bitte Ihre konkreten Fragen über das Kontaktformular. Wenn Sie eine Online-Beratung in Anspruch nehmen möchten, geben Sie das bitte an und teilen Sie uns vorab Ihren Wunschtermin mit (ca. 20 Minuten pro Person, zwischen 14:00 - 17:00 Uhr an Tagen, an denen unser Büro geöffnet ist).
Kontaktformular (auf Japanisch): www.daad.jp/ja/about-us/contact/

ゲーテ・インスティトゥート奨学金のお知らせ

ゲーテ・インスティトゥート（ドイツ文化センター）は，大学・高等専門学校・高等学校のドイツ語教育担当教員を対象に，ドイツ語教員向け奨学金プログラムを実施しています。**2024 年度募集予定の**プログラムは以下の通りです。

1. ドイツ語教員のためのランデスクンデ・教授法ゼミナール（2 週間)
2. ドイツ語教員のための語学コース（2 週間）
3. ドイツ語教員養成者のためのゼミナール

*　オンラインまたは現地での実施，またはその組み合わせ
*　ドイツで実施研修期間中の研修費用がゲーテ・インスティトゥートより支給されます。ドイツで実施の場合はそれに加えて宿泊費全額，ならびに旅費の補助金が支給されます。

< プログラム応募資格 >
大学または高等学校，高等専門学校でドイツ語を教えている，またはドイツ語教員養成に携わっている方のうち，次の条件を満たす方

- 過去数年間にドイツ政府の奨学金を受けていない
- これまでドイツ語教育とその促進に貢献しており，研修終了後少なくとも数年間，ドイツ語教育に携る予定である
- 研修で得た知識を，今後のドイツ語教育に役立つようフィードバックする意志がある
- 研修の全プログラムに参加できる
- 研修の前提となる必要なドイツ語力を備えている

詳細は，2023 年 9 月以降，ホームページの申込要領をご確認の上，
2023 年 10 月 10 日までにメールの添付でお送りください。
問い合わせ／申込：ゲーテ・インスティトゥート東京
ドイツ語教員研修支援プログラム係
TEL:03-3584-3201　E-Mail: stipendien-tokyo@goethe.de

DLL: Das Fort- und Weiterbildungsprogramm für Deutschlehrkräfte am Goethe-Institut Tokyo

Mit der Fort- und Weiterbildungsreihe **DLL – Deutsch Lehren Lernen** des Goethe-Instituts lernen Sie im gemeinsamen Austausch mit anderen Deutschlehrenden, wie guter Unterricht gelingen kann – anschaulich und praxisorientiert! Mit aktuellen fachdidaktischen Inhalten erweitern Sie Ihre eigenen Unterrichtskompetenzen und können sich als professionelle DaF-Lehrkraft qualifizieren. Ideen und Ansätze aus der Fortbildung können Sie dabei direkt in der Praxis umsetzen.

Das unterrichtsnahe Programm richtet sich an alle Interessierten, die sich als Lehrende des Faches Deutsch als Fremdsprache fort- oder weiterbilden möchten. Eine Teilnahme ist für DaF-Lehrende mit formaler Ausbildung oder ohne formale Ausbildung möglich. Auch ohne ein Germanistik- oder DaF-Studium absolviert zu haben, können Sie ihre Kompetenzen mit Einheiten aus der Reihe DLL ausbauen. Voraussetzung für eine erfolgreiche Teilnahme sind Sprachkenntnisse auf dem Niveau B2 nach dem Gemeinsamen Europäischen Referenzrahmen.

Das Goethe-Institut Tokyo bietet die DLL-Einheiten 1-6 in Form eines regionalen DLL-Zyklus regelmäßig an. Besuchen Sie unsere Website und erfahren Sie mehr über das Fort- und Weiterbildungsprogramm DLL – Deutsch Lehren Lernen.

Deutsch Lehren , Lernen - Goethe-Institut Japan

会費納入について

会員の皆様におかれましては，すみやかな会費納入にご協力いただきありがとうございます。

事務局では会員お一人お一人の会費ご納入に関して，年間を通じ必要に応じてご連絡を差し上げています。その際はご理解，ご協力賜りますようお願い申し上げます。

また，以下の点をご確認ください。

【会費割引制度】

前年度末までに 80 歳になられた方，常勤職をお持ちでない方，学生の方は，ご本人からのお申し出によって，年会費の割引を受けられます。会費規程をご確認の上，事務局までお申し出ください。

【口座自動振替によるご納入】

口座自動振替のお申込みは随時受け付けています。まだお申込みでない方は是非ご検討ください。申込書をお持ちでない方は事務局までご連絡ください。お申込みくださった時点でその年度の手続き締切りに間に合わなかった場合は，自動的に次年度開始の扱いとなります。その年の年会費は振込にてご納入くださるようお願い致します。

振替口座等の変更や年会費割引のお申し出は 4 月末までに事務局にご連絡ください。振替日は年に一度（7 月 1 日）のみです。振替ができなかった場合は，郵便振込をお願いいたします。

【郵便振込によるご納入】

口座自動振替をお申込みいただいてない方には，別途「日本独文学会年会費納入のお願い」と払込取扱票をお送りする予定です。

以上，よろしくお願い申し上げます。

ご不明の点，ご質問は事務局（TEL./FAX：03-5950-1147，Mail フォーム：http://www.jgg.jp/mailform/buero/）までお問い合わせください。

日本独文学会

一般社団法人日本独文学会会費規程

（2019年6月8日施行）

（目的）
第１条　この規程は，定款第７条の規定に基づき，入会金及び会費の納入に関し，必要な細則を定めるものとする。

（入会金）
第２条　会員は入会金として1,000 円を納入しなければならない。

（入会金の納期）
第３条　入会金は，この法人から入会承認の通知を受けた日から30日以内に納入しなければならない。

（会費）
第４条　会員は，次の会費（年額）を納入しなければならない。
正会員　　10,000 円
賛助会員　　30,000 円（学術交流団体など非営利団体の場合10,000円）

（会費の納期）
第５条　会員は，当該事業年度開始の7月末日までに，会費年額の全額を納付しなければならない。

（会費の減免）
第６条　4月1日現在で常勤職を持たない正会員の当該年度会費は，本人の申告に基づいて8,000円とする。
２　4月1日現在で大学・大学院およびこれに準ずる教育・研究機関に在学する正会員の当該年度会費は，本人の申告に基づいて5,000円とする。申告は，6月1日までに学生証ないしはそれに相当する証明書のコピーを郵送もしくはファックスで学会事務局に提出することによって行うものとする。
３　4月1日現在で満80歳以上の正会員の年度会費は，本人の申告に基づいて5,000円とする。申告は6月1日までに行うものとする。
４　会費の減免は申告が受理された年度から適用し，遡って適用されることはない。
５　常勤職を持たない正会員が常勤職に就いた場合は，身分が変わった直後

の4月20日までに身分の変更を学会事務局に届け出るものとする。

６　大学・大学院およびこれに準ずる教育・研究機関に在学する正会員の身分に変更があった場合は，身分が変わった直後の4月20日までに身分の変更を学会事務局に届け出るものとする。

（使用目的）

第７条　入会金及び会費は次の各号に定める事項に使用する。

（1）　本会の運営

（2）　本会の機関誌等の発行

（細則）

第８条　この規程に定めるもののほか，この規程の実施に必要な事項は，理事会の決議により別に定めることができる。

（改廃）

第９条　この規程の改廃は，総会の決議による。

第 20 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告（日本語部門）

日本独文学会･DAAD 賞日本語部門選考委員会は, 2023 年 1 月 30 日に第 1 回, 2 月 21 日に第 2 回，3 月 3 日に第 3 回の委員会を開催した。3 回とも Zoom によるオンライン会議方式であった。

選考委員は，太田達也（DAAD 推薦），河崎靖（委員長），草本晶，高橋優，津田保夫，安川晴基の 6 名である（敬称略）。

今回審査対象となったのは，研究書部門 2 点，論文部門 4 点であった。

第 1 回委員会では，審査対象の分担と審査方法を協議した。審査対象の分担については，1)委員それぞれの研究領域に近い著作・論文を委員本人の希望にもとづき審査すること，2)すべての対象作は複数の委員が審査することとした。審査方法については，各委員が分担した著作・論文についての評価を集約し，評価の高いものについて候補に残していくこととした。

第 2 回委員会では，各委員が審査報告を行い，それに続いて合同で討議した。この時点で，論文 1 点まで対象を絞り込み，次回までにそれを全員が精読し，合同の討議にもとづき最終決定を行うこととした。

第 3 回委員会では，各委員が審査報告を行い，合同で討議した結果，以下の結論を得た。

1) 研究書部門では，該当なしとする。
2) 論文部門では，該当なしとする。

（文責：河崎靖）

第 20 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告（ドイツ語部門）

日本独文学会・DAAD 賞ドイツ語部門選考委員会は，2023 年 1 月 30/31 日に第 1 回，3 月 6 日に第 2 回，3 月 30 日に第 3 回の委員会を開催した。3 回とも Zoom によるオンライン会議方式であった。

選考委員は, 生駒美喜（DAAD 推薦）, 大宮勘一郎, Ralph Degen, Mechthild Duppel-Takayama，徳永恭子，宮田眞治（委員長）の 6 名である（敬称略）。

今回審査対象となったのは，研究書部門 1 点，論文部門 9 点であった。

第 1 回委員会では，審査対象の分担と審査方法を協議した。審査対象の分担については，1)委員それぞれの研究領域に近い著作・論文を委員本人の希望にもとづき審査すること，2)すべての対象作は複数の委員が審査すること，とした。審査方法については，各委員が分担した著作・論文についての評価を集約し，評価の高いものについて候補に残していくこととした。

第 2 回委員会では，各委員が審査報告を行い，それに続いて合同で討議した。この時点で，著書 1 点，論文 4 点まで対象を絞り込み，次回までにそれを可能な限り全員が精読し，合同の討議にもとづき最終決定を行うこととした。

第 3 回委員会では，各委員が審査報告を行い，合同で討議した結果，以下の結論を得た。

1) 研究書部門では，次の 1 点を日本独文学会・DAAD 賞候補として推薦する。
Koji Ota（大田浩司）: Der freie Gebrauch des Eigenen. Zur Konzeption von Bildung und ästhetischer Erziehung bei Friedrich Hölderlin. (Würzburg: Königshausen & Neumann, 2021)

2) 論文部門では，次の 1 点を日本独文学会・DAAD 賞候補として推薦する。
Daisuke Baba（馬場大介）: Analogisches Denken zur Hybridität. Karl Florenz' *Geschichte der japanischen Litteratur* im Austausch der deutschen und der japanischen Literaturforschung. (Neue Beiträge zur Germanistik, Band 19/Heft 1)

以下に推薦理由を述べる。

ドイツ語研究書部門

Koji Ota: Der freie Gebrauch des Eigenen. Zur Konzeption von Bildung und ästhetischer Erziehung bei Friedrich Hölderlin. Königshausen & Neumann, 2021

本書は,「教養（Bildung)」の概念を軸として，従来の研究ではあまり注目されてこなかったヘルダーリンの教育思想を詳らかにし，そこからヘルダーリン文学を読み直そうとするものである。たえず成長する存在として人間を再定義したルソー以降，18 世紀の教育論は高度に発達していくが，自由と規律のバランスは解決の難しい問題であった。自らも家庭教師として教育の実践に携わったヘルダーリンは，ルソーの影響下で出発しながらも，その際の失敗の体験から，理想主義

的なルソーの思想を批判的に乗り越えようとした。その際，重要な役割を果たしたのが，人間の想像力を重視する美的教育の理念であり，自然科学の領域とも境を接しながら新たな人間像を提示した Bildung の概念であったとされる。

著者はヘルダーリンの書簡を丹念に読んで彼の教育思想の展開を跡づけるとともに,『ヒュペーリオン』にその反映を読み取っている。当時の書簡文化を視野に入れたメディア論的な切り口や，自己像と他者像の形成の相互関係を考察するポストコロニアル研究のアプローチも採り入れられており，本書の研究テーマの射程は広い。審査にあたっては，記述がやや図式的で特に作品分析が表面的なものにとどまっているとの意見も出たが，着眼点の斬新さと研究の視野の幅広さが新しい時代のドイツ文学研究の到来を予感させるものであり，総合的に見て受賞に値すると判断した。

ドイツ語論文部門

Daisuke Baba: Analogisches Denken zur Hybridität. Karl Florenz' *Geschichte der japanischen Litteratur* im Austausch der deutschen und der japanischen Literaturforschung. *Neue Beiträge zur Germanistik*, Band 19/Heft 1

本論文は，明治時代に東京帝国大学独文科の教授を務めたカール・フローレンツが著した『日本文学史』の成立過程を追い，この書物が 19 世紀ドイツの文学史記述と，日本側の国文学者らの文学史観の二つが合わさって出来上がった「ハイブリッド（異種混交)」的な性格のものであることを明らかにしている。

フローレンツは 1888 年に来日し，25 年間にわたり日本におけるゲルマニスティクの創設に携わり，ドイツに帰国後はハンブルク大学でドイツ初の日本学の教授となった。1906 年に出版された『日本文学史』は，ドイツ語で書かれた最初の本格的な日本文学史である。フローレンツは，扱う作家・作品や時代区分に関しては，先駆的な国文学者であった芳賀矢一の『国文学史十講』（1899）に強く依拠しているが，その一方，ヴィルヘルム・シェーラーの『ドイツ文学史』（1883）の文学史観に影響を受けている。シェーラーは 1200 年頃と 1800 年頃をドイツ文学の最盛期と捉え，約 300 年の周期で興隆と凋落が繰り返すと考えた。この独特の頽落史観をフローレンツは自らの日本文学史の記述に取り込んでいる。その結果，『日本文学史』は，必ずしも矛盾がないわけではない日独双方の見解が入り混じった書物となった。

日本の近代化の過程と近代的な学問の成立は，一般に「西洋化」と理解されており，そこでは「西洋→日本」の一方向的な文化移植が行われていたかのようにイメージされがちだが，それに対して本論文は，洋の東西の相互作用のなかで初期の日本文学史が構築されていった過程を詳らかにしている。先行する英語圏の日本文学史との関連など，なお精査すべき課題は残っていると思われるが，そもそも文学史記述とは何かと考える上でもきわめて啓発的な議論がなされていることは疑い得ない。最も受賞にふさわしい論文として審査員が一致して推した。

（文責：宮田眞治）

受賞の弁　ドイツ語研究書部門

大田 浩司

このたびは，第 20 回日本独文学会・DAAD 賞（ドイツ語研究書部門）という名誉ある賞をいただき，大変光栄に思っております。ご多忙にもかかわらず審査の任にあたってくださった選考委員の先生方には心より感謝申し上げます。今回受賞したドイツ語の研究書 *Der freie Gebrauch des Eigenen. Zur Konzeption von Bildung und ästhetischer Erziehung bei Friedrich Hölderlin.*（『固有なものの自由な使用――フリードリヒ・ヘルダーリンにおける形成と美的教育の構想について』）は，2012／2013 年冬学期にギーセン大学に提出した博士論文を加筆・修正してインターネット上で公開した電子書籍にさらに手を加え，2021 年に書籍版として出版したものです。博士論文の提出も書籍の出版も長い時間を要しましたが，長い時間をかけて十分に内容を熟成させたことが今回の受賞につながったと考えています。日独両国の様々な方々のご助力・ご指導がなければ本書が出版されることはなかったでしょう。この場をお借りして篤くお礼申し上げます。特にギーセン大学名誉教授の Gerhard Kurz 先生と立教大学名誉教授の高橋輝暁先生には大変お世話になりました。改めて感謝申し上げます。

従来のヘルダーリン研究において，ヘルダーリンの Bildung 概念というテーマは，主に哲学的・文学的な観点から論じられてきました。私は本書において，ヘルダーリンの Bildung をめぐる思考が，18 世紀末ドイツの社会的・思想的状況の中からどのように芽生え，形成されてきたかについて，哲学，文学，教育学，社会学，科学史，メディア論，ジェンダー論，ポストコロニアル理論といった様々な観点から領域横断的に論究し，ヘルダーリンの Bildung 概念が持つ多面性と多層性に光を当てることを試みました。

ドイツ語の Bildung という概念は大正教養主義の時代に「教養」と訳されて日本に輸入されましたが，しだいにこの概念が持つ「形成」という動的な意味合いが薄れ，静的・安定的状態と結びつく概念であると一般的に考えられるようになりました。しかし，ヘルダーリンにおける Bildung とは，対立する様々な衝動（Trieb）間の抗争の中で平衡状態を生み出そうとする終わりなき動的なプロセス自体を意味しています。本書が読者の Bildung 概念の再発見に寄与することができれば幸いです。

（帝京大学教授）

受賞の弁　ドイツ語論文部門

馬場大介

このたびは第 20 回日本独文学会・DAAD 賞を頂戴し，恐悦至極に存じます。審査にあたってくださった方々に，心から感謝申し上げます。また，これまでご指導ご鞭撻いただいた皆様にも，この場を借りて深甚の謝意を表したく存じます。とくに，ダーヴィッド・ヴァイス先生（九州大学）は，お忙しいなか本論文のドイツ語を校正してくださり，感謝の念に堪えません。

本論文は，『近代日本文学史記述のハイブリッドな一起源：カール・フローレンツ『日本文学史』における日独の学術文化接触』（三元社，2020 年）の原稿を改稿していく作業と並行して執筆したものです。この著作の内容は，日本のドイツ文学と日本文学だけでなく，ドイツ語圏の日本学の成立にも関わる国際的かつ学際的なアスペクトを備えています。その中核をなす議論を，本論文に凝縮するかたちで収めました。本論文の主張は，日独の文学研究の要素が混淆して成立した著作は，その著者が両方の学術的伝統に向けていた類比的思考（Analogie）に着目することで具体的に解釈できるというものです。その解釈の可能性がどの程度有効なのかを，比較文学論として読者に問うています。

日独の混淆性を類比的思考によって解釈するという視点については，機関誌第 157 号の Analogie – Ähnlichkeitsdenken in Literatur und Kultur（iudicium，2019 年）から多大な示唆を受けました。これを読むことで，私自身もドイツ語で論文を投稿しようと決意しました。さらに，2015 年に始まったドイツ語論文執筆ワークショップに数年にわたって実行委員として携わるなかで，論文執筆のスキルを磨く上で多くのことを学びました。査読の段階では，本論文を丹念に読んでいただき，的確かつ建設的なコメントを数多く頂戴しました。こうして振り返ってみると，ドイツ語で自身の研究内容を論じるという難業は，独文学会における研究活動を通じてはじめて可能になったと言えます。

ドイツ文学の分野に限らず，言語・文学・文化を専門とする研究者の数は，減少の一途をたどっています。その一方で，研究活動の国際性と学際性が声高に叫ばれるとともに，研究成果のオンライン刊行が着々と進められつつあります。こうした大きな変化の中で，ドイツ語を母語としない「外地のゲルマニスト」にあたるわたしたちが，ドイツ語で研究成果を発表することは，今後ますます重要になると思います。こうした状況を私は好機と捉えつつ，このたびの受賞を励みにして，日本とドイツ語圏の間をいっそう大きく介していく所存です。

（立教大学教育講師）

日本独文学会 2023 年度総会・春季研究発表会報告

2023 年 9 月 1 日

2023 年総会・春季研究発表会は，6 月 3 日（土）および 4 日（日）に明治大学にて対面方式で開催された。

1 日目は 10：50〜18：00，2 日目は 10：00〜13：10 に開催された。研究発表に先立ち，日本独文学会総会，日本独文学会・DAAD 賞授賞式，ドイツ語教育部会総会が開催された。研究発表会の内訳はシンポジウム 4 本，口頭発表 9 本，ポスター発表 1 本，ブース発表 2 本であった。また，学会プログラムと並行して，朝日出版社・郁文堂・三修社・同学社・白水社・ひつじ書房各書店による書籍展示が実施された。

収支報告は以下の通り：

収入：

学会本部運営補助金	¥600,000
ドイツ語学文学振興会からの助成	¥50,000
明治大学からの学会補助費	¥100,000
参加費	¥579,000
二日目研究会教室使用料	¥58,000
ドイツ語教育部会アルバイト代	¥26,000
ドイツ語教育部会入試問題展示室使用料	¥2,000
計	¥1,415,000

支出：

研究発表会教室使用料	¥219,400
二日目研究会教室使用料	¥58,000
ドイツ語教育部会入試問題展示室使用料	¥2,000
人件費（アルバイト代）	¥218,000
スタッフ昼食お弁当代	¥71,280
スタッフ飲み物代	¥12,733
コピー代	¥1,750
郵送料	¥520
ドイツ語教育部会アルバイト代	¥26,000
学会事務局への返金	¥805,317
計	¥1,415,000
収支合計	¥0

（企画担当理事：川島隆・武田利勝）

2022 年度ドイツ文化ゼミナール報告

2022 年度ドイツ文化ゼミナールは，2023 年 3 月 7 日（日）から 11 日（土）まで，慶應義塾大学日吉キャンパスで開催された。講師は Joseph Vogl 教授（ベルリン・フンボルト大学）。Covid-19 の蔓延の影響がまだ残っており，以前のような一週間近い合宿でのゼミナール開催は断念し，「通い」での実施となった。遠隔寄りの参加者のために，慶應義塾大学内の宿泊施設を利用することはできたが，夜の時間帯のプログラムなどは，当然ながら合宿のようにはできなかった。それでも，３年ぶりとなる対面でのゼミナール開催ということもあり，日本全国はもとより，韓国，中国からも多くの参加者を得て，活発な討論が行われた。

総合テーマ：Literatur, Ästhetik und Ökonomie – Poetiken des Wissens

参加者：
Joseph Vogl（ベルリン・フンボルト大学、招聘講師），Jin Yang（中国・中山大学），杉山東洋（京都大学），金城ハウプトマン朱美（富山県立大学），中村祐子（東京大学），石橋奈智（東京大学），渡邊徳明（日本大学），假谷祥子（神戸大学），菅谷優（東京大学），針貝真理子（東京大学），Alexander Imig（中京大学），進藤良太（九州大学），小林英起子（広島大学），中村大介（慶應義塾大学），茅野大樹（筑波大学），海老根剛（大阪市立大学），林弘晃（九州大学），長尾亮太朗（九州大学），山中慎太郎（東京大学），川島隆（京都大学），橋本紘樹（松山大学），川村和宏（岩手大学），三宅舞（獨協大学），大澤遼可（九州大学），若山真理子（東京大学/ベルリン自由大学），Jiang Linjing（復旦大学），Christian Baier（ソウル大学），Jo Hyang（ソウル大学），Oh Soon-Hee（ソウル大学），板谷恭子（ベルリン・フンボルト大学），有家真奈（慶應義塾大学），平野遥海（東京大学），Peter Polzin（チューリヒ・ハイジ博物館），Peter Otto Büttner（チューリヒ・ハイジ博物館），粂川麻里生（慶應義塾大学）**，遠藤浩介（中央大学）*，Andreas Becker（慶應義塾大学）*，Thomas Schwarz（日本大学）*，柳橋大輔（法政大学）*，寺田雄介（山梨大学），フォン・ボルケ亜弓（慶應義塾大学）*，大田浩司（帝京大学）*，高橋優（福島大学）*，久山雄甫（神戸大学）*，高田梓（千葉大学）*，二藤拓人（西南学院大学）*
（アルファベット順，　**実行委員長，　*実行委員）

総合テーマについて
今回のシンポジウムでは，文学・美学と経済の広範な交流関係について，初期近代から現代までの広範な時代にまたがって議論した。具体的な事例やテキストを参照しつつ，Poetik des ökonomischen Wissens についての議論が展開され，経済学の論理的戦略と文学的形式への経済的浸透について探究した。同時に，貸し倒れから善良な商人，投機家から起業家的自己までの幅広い範囲の＜経済的人間>の

存在様態が考察された。
Gruppenarbeit は，下記の４つのテーマについて期間中並行して議論された。

1. 市民社会の経済
18 世紀末は, 身分制から機能志向の社会への変革により, 社会の変容が起こった。人々の生活世界は多様化し，人間の本性は歴史的に偶発的で不確定なものと見なされるようになった。市民的個人は，絶えず進歩し新しいものに対して開かれているとされ，自己は最終的な正当性の基盤とされた。市民的個人という概念においては, 経済的および政治的概念（bourgeois と citoyen）が重ね合わせられており，その成立史を通じて，人間性と教養の主体としてだけでなく，近代的な所有個人主義の具現化としてのブルジョア主体も現れている。

2. マルクスと近代
マルクスが経済的論理があらゆる生活領域を支配する力強いダイナミクスを語った際，それは単に現代の「経済」の秘密を解読するだけでなく，文学と経済が交わるテーマや動機，物語，シナリオも呼び起こされたことを意味していた。マルクスとエンゲルスにとっても，文学的テキストは経済の変動を示す地震計として機能し，ジョルジュ・ルカーチや批判的理論は，基盤と上層構造，物質性と精神，生産とイデオロギーの関係を新たに定義するために文学的形式の反省的な解釈を展開した。

3. 労働と生産
中世末から労働の概念は変容し，労苦と困窮の表現から，生命維持活動や道徳的に実りのある活動を指すもの，そして経済的価値の源泉へと変わってきた。アダム・スミスによれば，投入される労働時間と分業は，生産や生産性の重要な要因となる。19 世紀には，産業とサービスの社会化を通じて，生産的な労働と非生産的な労働，資本と労働，循環と生産の領域の緊張関係が議論され，描写された。サービス社会への移行や，近年の「労働の終わり」に関する予測を超えて，労働と生産は自己を犠牲にして自身の創造物によって消耗される経済的人間の基盤を形成してきた。また，人間と自然の間の代謝として労働を理解する必要性は，生態学的な問題への感受性として表れている。これは文学的な表現形式と「文学者」および文学自体の機能の変化にもつながった。

4. 貨幣，信用，債務
長い歴史の中で，貨幣や信用の関係についての考察は，ビジネスの実践，経済的ダイナミクス，危機だけでなく，社会的な領域全体における特定の対立状況にも関わってきた。アリストテレスの金融と高利貸し業に対する否定的な見解から，紙幣と公的信用の導入，近代的な手形の使用，そして「現代文化」（ゲオルク・ジンメル）の特異性としての通貨流通まで，記号と債務の循環が観察された。これは一方では社会的な結びつきを構築しドラマを生み出すとともに，他方では他の

（文学的，メディア的，美学的）記号秩序との近接や競合にも巻き込まれるものであった。

3 月 7 日（火）
最初に文化ゼミナール実行委員長条川麻里生より文化ゼミナール再開に至った経緯と関係者に対する謝辞が述べられ，続いて担当理事・濱中春氏および DAAD 日本事務所代表 Axel Karpenstein 氏により挨拶と感謝の言葉が述べられた。その後招待講師の講演でゼミナールが開始された。

Eröffnungsvortrag
Joseph Vogl (Humboldt-Universität zu Berlin): Epoche des ökonomischen Menschen

3 月 8 日（水）
Plenarvortrag I
Ekiko Kobayashi(Universität Hiroshima): Geldprobleme, Intrigen und Philanthropie in Lessings und Weißes Komödien der späten Aufklärung

Hyang Jo (Seoul National University): Goethes *Wilhelm Meisters Lehrjahre*, gelesen in Verbindung mit Adam Smiths *The Theory of Moral Sentiments*

Gruppenarbeit I
1. (Ökonomie der bürgerlichen Gesellschaft) Novalis: Heinrich von Ofterdingen. (Leitung: Shoko Kariya)
2. (Marx und die Moderne) Karl Marx: Das Kapital. Der Fetischcharakter der Ware und sein Geheimnis. (Leitung: Thomas Schwarz)
3. (Arbeit und Produktion) Wilhelm Hauff: Das kalte Herz; Manfred Frank: Steinherz und Geldseele. (Leitung: Yu Takahashi)
4. (Geld, Kredit und Schulden) Aristoteles: Politik. (Leitung: Koji Ota)

Plenarvortrag II
Ryotaro Nagao (Universität Kyushu): Über Friedrich Schlegels Begriff „Organisation“

Daisuke Nakamura (Keio-Universität): Kreisläufe in einem Schloss – E.T.A. Hoffmanns Das Majorat

Filmabend: »Nachrichten aus der ideologischen Antike« (D 2008, R: Alexander Kluge) [Auszug] (Moderation: Andreas Becker, Daisuke Yanagibashi)

3 月 9 日（木）

Plenarvortrag III

Soon-Hee Oh (Seoul National University): Kapitalistische Hypochondrie in *Wilhelm Meisters Lehrjahre*

Hiroki Chino (Universität Tsukuba): Kapitalismus als Relation. Über den Kult der Dinge bei Marx und Benjamin

Plenarvortrag IV

Takeshi Ebine (Osaka Metropolitan University): Die gesellschaftskritische Interpretation eines Dichters. Poetologische Operationen in der Baudelaire-Marx-Lektüre bei Walter Benjamin

Yu Sugaya (Universität Tokio): Seismogramm von der „Erschütterung der Warenwirtschaft“. Baudelaires Moderne und Benjamins Gegenwart

Gruppenarbeit II

1. (Ökonomie der bürgerlichen Gesellschaft) Thomas Mann: Buddenbrooks. (Leitung: Takashi Kawashima)
2. (Marx und die Moderne) Walter Benjamin: Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit. (Leitung: Daisuke Yanagibashi)
3. (Arbeit und Produktion) Gottfried Keller: Die missbrauchten Liebesbriefe. (Leitung: Toyo Sugiyama)
4. (Geld, Kredit und Schulden) Gotthold Ephraim Lessing: Minna von Barnhelm oder das Soldatenglück. (Leitung: Ekiko Kobayashi)

3 月 10 日（金）

Plenarvortrag V

Linjing Jiang (Fudan-Universität): Land und Meer, staatliche Souveränität oder wirtschaftliche Herrschaft – Carl Schmitts Melville-Deutung

Thomas Schwartz (Nihon-Universität):
The Horror. Die ursprüngliche Akkumulation in Joseph Conrads *Heart of Darkness*

Gruppenarbeit III

1. (Ökonomie der bürgerlichen Gesellschaft) Franz Kafka: Das Urteil. (Leitung: Leopold Schlöndorff)
2. (Marx und die Moderne) Georg Lukács: Es geht um den Realismus. (Leitung: Hiroaki Hayashi)
3. (Arbeit und Produktion) Walter Benjamin: Das Paris des Second Empire bei Baudelaire.

(Leitung: Nachi Ishibashi)
4. (Geld, Kredit und Schulden) Johann Wolfgang von Goethe: Faust; Hans Christoph Binswanger: Geld und Magie. (Leitung: Akemi-Kaneshiro Hauptmann)

Plenarvortrag VI
Kazuhiro Kawamura (Universität Iwate):
Michael Endes Geldanschauung – Endes Libretto und *Geld und Magie*

Andreas Becker (Keio-Universität): Über die Gefühlsökonomien von Scham und Schuld. Christian Petzolds »Wolfsburg« (2003) und Nagisa Ōshimas »Shōnen« (»Der Junge«, 1969)

Abschlussveranstaltung

3 月 11 日（土）
Arbeitsgruppe IV
1. (Ökonomie der bürgerlichen Gesellschaft) Jonas Lüscher: Kraft. (Leitung: Ryota Shindo)
2. (Marx und die Moderne) Theodor W. Adorno: Résumée über Kulturindustrie. (Leitung: Andreas Becker)
3. (Arbeit und Produktion) Kathrin Röggla: Wir schlafen nicht. (Leitung: Noriaki Watanabe)
4. (Geld, Kredit und Schulden) Georg Simmel: Das Geld in der modernen Kultur; Michael Ende: Momo. (Leitung: Alexander Imig)

Schlussvortrag
Joseph Vogl (Humboldt-Universität zu Berlin): Romantische Ökonomie: das Jahr 1797

Schlussdiskussion
Moderation: Andreas Becker

ゼミナールを振り返って

1）全体として
内容的には，ゲスト講師 Joseph Vogl 氏の協力的な姿勢と，参加者各位の高いモチベーションによって，連日良い研究会が続けられたと感じている。ただ，プログラムがやや盛りだくさん過ぎた，という反省は各所から出ていた。Vortrag は多過ぎたし，Arbeitstexte も多過ぎ，長過ぎて，毎日の終わりには多くの参加者が疲労困憊していた。今後は，より無理なく参加できるプログラムを考えるべきだろう。

2) コロナ禍後の再開について

コロナ禍により，2020 年、2021 年は前委員会に「オンラインによる代替企画」を開催していただき，今回３年ぶりの対面開催となった。しかも，コロナ禍前の「温泉ホテルでの合宿」という形式に戻ったわけでもなく，神奈川県の大学で「通い」によるゼミナールを 5 日間行った。その意味では，細かい実務の点で初めて経験する課題も多く，実行委員や関係諸氏の負担も大きかった。改めて御礼申し上げたい。

3) 今後について

大学教員が非常に多忙になってきている一方で，ドイツ語教員は減り，学会員も少なくなってきている現在，このようなゼミナールに参加できる人も，実行委員として企画運営できる人も，確実に減ってきている。準備作業の中でも，実際のゼミナールにおいても，心身の健康を害するほどの頑張りによってかろうじて持ち堪えている方々が見受けられた。今後は，期間の短縮や，プログラムの縮減，あるいはゼミナールの形態を根本から変えるなどについて，議論が必要と思われる。

（文責：粂川麻里生）

第 27 回ドイツ語教授法ゼミナール報告

第 27 回ドイツ語教授法ゼミナールは，2023 年 3 月 15 日から 17 日の 3 日間，多摩永山情報教育センター（東京都多摩市）にて開催された。

今回の教授法ゼミナールでは，パーダーボーン大学（Universität Paderborn）から Sandra Ballweg 教授（以下「Prof. Ballweg」と称する）を招待講師として招いた。Prof. Ballweg は過去に Bielefeld, Kassel, Darmstadt, Marburg 大学にて教鞭をとられた。ライティング支援，ポートフォリオ活動，形成的評価などを専門とし，それらに関する研究と教員養成・研修にも取り組まれている。また，スイス・ティチーノ州の州試験では，アドバイザーとしても従事されている。

ゼミナールのテーマおよび参加者は以下の通りである。

総合テーマ：「テクストを評価する―ドイツ語の授業におけるライティング活動の成果物の扱いを考える―」（Texte beurteilen – Überlegungen zum Umgang mit Schreibprodukten im DaF-Unterricht）

参加者：*Elvira Bachmaier（麗澤大学）, Diana Beier-Taguchi（東京外国語大学）, **Olga Czyzak（中央大学）, 堀口順子（九州大学）, Nina Kanematsu（上智大学）, Axel Karpenstein（DAAD Tokyo）, 小池駿（早稲田大学高等学院）, Eva Koizumi-Reithofer（東京学芸大学）, 草本晶（麗澤大学）, Heiko Lang（立教大学）, *村元麻衣 [1]（名古屋大学）, 中川慎二（関西学院大学）, 那須妙子（Nasu Koichi Kunstraum）, 太田達也（南山大学）, Oliver Phan-Müller（Goethe-Institut）, Markus Rude（筑波大学）, 齋藤正樹（早稲田大学）, *坂本真一（立教大学）, Gabriela Maria Schmidt（日本大学）, Holger Schütterle（麗澤大学）, Christian Steger（獨協大学）, 鈴木友美加（名古屋大学・院生）, *武井佑介（麗澤大学）, 牛山さおり（立教大学）, Bertlinde Vögel（大阪大学）, *Carsten Waychert（京都産業大学）, *Nancy Yanagita（上智大学）（アルファベット順, **実行委員長, *実行委員）

[1] ゼミ当日は不参加だったが，実行委員のため氏名を記載する。

第 27 回ドイツ語教授法ゼミナールプログラム

<table>
<tr><td></td><td>15.03</td><td>16.03</td><td>17.03</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Vormittag</td><td rowspan="2"></td><td>Workshop 1</td><td rowspan="2">Workshop 3
Abschlussreflexion</td></tr>
<tr><td>Vortrag 2</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Nachmittag</td><td>Anreise</td><td>Workshop 2</td><td rowspan="5">Abreise</td></tr>
<tr><td>Einstieg</td><td>Forschungscafé</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Abend</td><td>Vortrag 1</td><td>Vortrag 3</td></tr>
<tr><td>Forschungsaustausch</td><td>Austausch und
fachliche Vernetzung</td></tr>
</table>

1. 招待講師による講演およびワークショップ

Prof. Ballweg による講演とワークショップは，３日間で計３回ずつ行われた。講演は「ライティングのプロセス」「成果物としてのテクスト」「テクストの評価」を総合的なキーワードとし，毎回異なるテーマ（Schreibprozesse und Schreibprodukte, Digitale und analoge Textproduktion und Bewertungsmöglichkeiten, Peer-Feedback, Schreib-konferenzen und Portfolioarbeit）で進められた。ワークショップは，すべて前日の講演と対をなしている。

ゼミナールはテクストを書く能力，成果物としてのテクストに対するフィードバック，評価におけるさまざまなアプローチを中心に進められた。とりわけアプローチについては形成的評価，協働学習におけるライティング活動である Schreibkonferenz，ポートフォリオ，ピア・フィードバックの活動などが含まれ，これらを考察，議論することが，この DaF ゼミナール全体の主旨である。

【講演 1】

初日午後に行われた講演 „Schreibprozesse und Schreibprodukte : Zum Umgang mit Texten“では，最初にテクストについて考える時間が設けられた。そしてテクスト能力には自分の意図を適切に伝える文を書く力，テクストから抽出した情報を活用する力などが含まれることが説明され, テクストを誰か他者に向けて書くのか, 自分自身に向けて書くのかといった機能面にも着目した。そしてライティング能力には，テクストを作成する能力のみならず，計画性や処理能力，学習あるいはライティングのストラテジーなどが複合的に関連付けられることが紹介された。

講演中には，参加者自身が今までに受けてきたライティング教育の経験を振り返る時間，さらに自分がどのような書き手のタイプなのかなどを考える時間が設けられた。学習者のライティング活動をより理解するためにも，私たち自身のラ

イティング経験などについて振り返ることはとても有益であった。同時に，今の時代に即したライティング指導に必要なことを考えるきっかけとなった。

【ワークショップ 1】

ワークショップ 1 は講演 1 の内容に関連し，„Bewerten und beurteilen“というタイトルで，テクストの評価に焦点を当て，文法の正確性，語彙の豊富さ，内容などをどのように評価しているのか，良い書き手とは何かといったテーマが取り上げられた。実際に学生が書いたテクストをもとに，いくつかの基準を用いながら，テクストをどのように修正できるか，評価できるかをグループワークで話し合った。そして修正提案をどのように学生に伝えるのかという点については，それぞれの学生の段階に応じた評価基準の必要性なども含めて検討することができた。

教員には学習者のパフォーマンスを観察，分析，評価する能力に加え，学習者のモチベーションを高める力，評価を適切に言語化する能力などが求められることが示された。

【講演 2】

2 日目午前の講演では，„Digitale und analoge Texte – Produktion und Bewertung“というテーマが取り上げられた。近年ライティングを取り巻く環境と媒体は多様化し，ライティング能力はマルチリテラシーになりつつある。コミュニケーションの手段，およびテクストの種類が多様化している現状を私たち自身が認識したうえで，社会的実践としてのリテラシーという側面を授業に取り入れるためには何が必要なのかを検討した。

この講演では，例えば授業に協働的ライティング（Kollaboratives Schreiben）を導入することが提案された。協働的ライティングでは GoogleDocs，ZUMpad，Cryptpad などを使用することによって，学習者も時間や空間に縛られることなくテクストを書くことが可能となる。この技術の導入が，学習者のメディア能力を向上させ，ペアあるいはチームで協働の能力を育成することにもつながることが説明された。

そしてデジタル空間におけるライティングに関して，人工知能などとどのように向き合い，それらをどのように活用するのかという点について，グループで話す時間が設けられた。

【ワークショップ 2】

このワークショップは講演 2 の内容と関連し „Schreiben und Bewerten im digitalen Raum“ というテーマのもと，これからのライティング指導を考えることを目標に行われた。同じ文章を ChatGPT，mind-verse，DeepL などにかけて，どのような違いが生まれるのかをグループで確認し，実際に ChatGPT を使ってテクストを書くなどの課題に取り組んだ。非常に短時間でテクストが生成される様子を体験し，出来上がったテクストの問題点がどこにあるのかなどを，グループ内で議論した。

その後，上記のようなデジタルツールが外国語授業にどのような変化をもたらすのかについて，意見やコメントを Moodle のフォーラムに投稿し，授業での学習目標やアクティビティにどのようにデジタルツールを活かしていくかを自由にディスカッションし，アイディアを共有した。

【講演 3】

2 日目午後の講演は „Peer-Feedback, Schreibkonferenzen & Portfolioarbeit: Textarbeit und formative Evaluation“ というタイトルで行われた。教員が学生の理解度を頻繁にかつ相互に評価する形成的評価では，その過程で収集した情報を実際の授業に反映させることで，学生のパフォーマンス，学習意欲などを向上させることができることが示された。

教師から学生へのフィードバックとは異なり，学生同士などでおこなうピア・フィードバックでは，読者の視点を予測しやすく，修正などへの心理的負担が軽くなるという側面も紹介された。ピア・フィードバックをグループで行う活動として，Schreibkonferenz が紹介された。さらに学習者の成果を収集し，進歩や成果を示すポートフォリオ活動では，学習プロセスを振り返ることもでき，自己評価と外部評価を満たすものであることにも言及された。学習者が今までの学習を内省することは，自らが学びから得たことを分析し，将来の学習を計画することにもつながることが示された。

【ワークショップ 3】

3 日目午前のワークショップは，講演 3 と関連付けて „Möglichkeiten der formativen Evaluation“ として実施された。デジタル化や多言語化が進む時代に，自分の授業で活かせることなどを検討するために，グループによる自由なディスカッションおよび振り返りが行われた。

2. 参加者による発表

2 日目午後には Forschungscafé として参加者による研究発表が行われた。発表のタイトルは以下のとおりである。

- Elvira Bachmaier, Diana Beier-Taguchi, Nina Kanematsu, Christian Steger: Schulentwicklungsprojekt „Deutschförderung Plus“ – Kriterien zur Beurteilung der Schreibkompetenz von (mehrsprachigen) Schüler:innen
- Heiko Lang: Texte gemeinsam und fair berurteilen: Ein Praxisbericht
- Taeko Nasu: „Dialogue journal“ und dessen digitale Variation
- Nancy Yanagita: Formative Beurteilung im DaF-Anfänger:innenunterricht: Potenziale, Grenzen, Schwierigkeiten

3. 総括

第 27 回ドイツ語教授法ゼミナールは対面での形式で再開され，Prof. Ballweg の温かいお人柄もあり，非常に和やかな雰囲気のなか，国籍や専門にかかわらず，活発な発言や議論がみられた。Prof. Ballweg による講演とワークショップを通して，参加者は自らの経験を振り返ると同時に，ChatGPT などのツールを使ってみるなどの体験を通して熟考，議論する時間が多く設けられた。授業におけるライティングに関して，成果物の評価，協働的な活動，AI との付き合い方などさまざまな観点から検討を重ねることができたのは，大変有意義な時間であった。このゼミナールで得た知識や経験は，今後のよりよい授業運営につながると確信している。

なお，ゼミナールの実施にあたっては，例年同様，日本独文学会，Goethe-Institut から多大な支援をいただいた。この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。

（文責：牛山　さおり）

2022 年度ドイツ語教員養成･研修講座報告

1. 本講座の運営について

ドイツ語教育部会，東京ドイツ文化センターとの共催で開催している「ドイツ語教員養成・研修講座」は，2021 年 10 月から Zoom による全面オンライン開催に移行し，全国からの参加が可能となっている。受講者は，ワークショップへの参加に加え，各モジュールのテーマについてレポートを作成し提出することが求められる。また，専用のプラットフォームである Moodle 上では，受講者同士，また受講者と講師の間でドイツ語教育をめぐるディスカッションが展開され，受講者・講師双方にとって，ドイツ語教育について再考する刺激的な議論の場となっている。

2. 2021 年秋開講のコースについて

2021 年秋開講のコースは，時流に合わせて講座目的の見直しを行い，それに合わせて講座内容も充実させている。前期が 2021 年 10 月から 2022 年 7 月までの 8 回のワークショップで 7 モジュール，後期が 2022 年 10 月から 2023 年 9 月までの 8 回のワークショップで 4 モジュールならびに *Deutsch Lehren Lernen 4* （以下 DLL）の課題，計 11 のモジュールからなる。後期コースには 20 名の受講者が参加し，2023 年 7 月の時点で第 7 回ワークショップまで終了した。

後期コースのワークショップ開催日，モジュールのテーマ並びに講師は以下のとおりである。

後期コース（2022 年 10 月—2023 年 9 月）

ワークショップ	日付	ワークショップとモジュールのテーマ	
		前半	後半
1	10 月 22 日	外部講師による講演 中川慎二	**M8**: ランデスクンデと異文化理解 野村幸宏，草本晶
2	11 月 12 日	DLL 導入ワークショップ	
3	12 月 17 日	M8 のレポートの評価と討論	**M9**: 様々なメディアと ICT の導入 岩居弘樹、境一三
4	1 月 21 日	M9 のレポートの評価と討論	DLL4，PEP の準備
5	4 月 22 日	DLL4，PEP の準備	**M10**: テストと評価 坂本真一，吉村創
6	6 月 24 日	Praxiserkundungsprojekt (PEP) プレゼンテーション	
7	7 月 22 日	M10 のレポートの評価と討論	**M11**: 学習者の動機づけとインターアクション 藤原三枝子，森田昌美
8	9 月 23 日	M11 のレポートの評価と討論	講座の総括

日本独文学会研究叢書新刊のご案内

152 号：「発話を越えたところに及ぶ文法の可能性 －話し手指向性と聞き手指向性－」
[Perlokutionäre Möglichkeiten in der Grammatik: Sprecher- und Hörerorientierung]
編集者：森芳樹
執筆者：伊藤 克将，森 芳樹，藤井 俊吾，宮田 瑞穂，高畑 明里
発行日：2023 年 6 月 3 日

支部報告

北海道支部

〇2023 年 3 月 28 日に幹事会が開催され，業務の分担・引き継ぎが行われた。

東北支部

〇2022 年 11 月 12 日（土）に対面およびオンラインにて第 64 回研究発表会および総会が行われ，活発な議論がなされた。発表内容は下記の通り。
・嶋崎啓「条件文に用いられる未来形」
・竹内拓史「ヴィルヘルム・フルトヴェングラーの「非ナチ化のための質問票」における虚偽記載とそのトーマス・マンからの影響の可能性について」
・佐藤研一「レッシングの喜劇『ミンナ・フォン・バルンヘルム』――宮廷からの逃走――」

〇機関誌『東北ドイツ文学研究』第 63 号（2022 年）を 2023 年 3 月 31 日に刊行した。内容は下記の通り。
・Motoari SUZUKI「Aspects of Metonymies and Metonymical Words: The Case Study of the Semantic Spectrum in the German Economic Words」
・QI Liang「Über die Anwendbarkeit der japanischen Perspektivtheorie auf Deutsch, Chinesisch und Englisch —*Kommen* und *gehen* als Beispiel」
田中岩男「望遠鏡と顕微鏡，あるいは「仮面」社会の小道具たち—鷗外と『ファウスト』（補論）」
・庄司知記「注釈から批評へ　—ある小さな文献学」
・Takanobu SETTSU「Groteskkomik in Karl Valentins Einakter *Der Theaterbesuch*」
・斎藤成夫「絶望のペリペテイア—ハイナー・ミュラー『フィロクテート』にみる宿命としての国家」

〇2022 年 6 月 3 日現在の会員数：82 人（新入会員 1 名，退会 1 名）

〇次回研究発表会：2023 年 11 月 25 日（土）山形地区開催（山形大学）予定（詳細調整中）

北陸支部

〇2023 年 3 月 25 日付で『ドイツ語文化圏研究』第 19 号を発行した。

関東支部

〇2023 年 6 月 11 日（日）に Zoom にて総会が行われ，新幹事会（任期 2 年）が

正式に発足した。分掌は以下の通り。
支部長　若林　恵
支部選出理事　浅井　英樹
庶務　江口　大輔，前田　佳一
会計　時田　伊津子
広報　杉山　有紀子

〇2023 年 12 月 10 日（日）に第 14 回関東支部研究発表会を行う予定。現在発表者を募集中（締め切りは 9 月 30 日（土））。詳細は関東支部ホームページを参照のこと。

東海支部
〇会員数　108 名（2023 年 7 月 8 日時点）

〇役員選挙
4 月 29 日，第 2 回東海支部幹事会で選挙管理委員長立会いのもと，理事選挙の開票作業をおこない，以下の通りとなった。
支部選出理事（二年任期）：島田了

〇2023 年度日本独文学会東海支部夏季研究発表会
日時：7 月 8 日(土曜日)　14 時より
場所：愛知学院大学名城公園キャンパスキャッスルホール 2 階 1204 教室
研究発表
1) 高橋美穂：ドイツ語と日本語の移動表現の比較－『モモ』の一場面を例に－
2) 田村建一：ゲーテ時代のドイツ語文学作品における呼称代名詞 Ihr と Er/Sie の用法
3) Oliver Bayerlein, Tatsuya Ohta: Google war gestern: Was die KI für Lehrkräfte tun kann

〇懇親会
研究発表会終了後，愛知学院大学名城公園キャンパス内，猿 Café にて開催。

〇合評会
2023 年秋に，機関誌『ドイツ文学研究』第 55 号を発刊予定，12 月 9 日（土曜日）午前中に合評会を，愛知大学名古屋キャンパスで予定。

〇2023 年度総会・冬季研究発表会の開催
12 月 9 日(土曜日)の午後を予定，対面形式で，会場は愛知大学名古屋キャンパスを予定。

京都支部

〇2023 年度春季研究発表会

日時：2023 年 7 月 1 日（土）13：30～17：20

会場：京都外国語大学 4 号館 5 階 452 教室

参加者数：43 名

研究発表：

１．アルザス語の母音連続にみられる子音生起現象の通時的複合性“最適”な挿入子音の選択

作本 大祐 氏（京都大学大学院生）

２．語りの視点と承認の問題

― フランツ・カフカ『歌姫ヨゼフィーネあるいはネズミ族』―

山下 大輔 氏（京都大学非常勤）

３．フランツ・カフカの遺稿長編と短編の関係をめぐって

林嵜 伸二 氏（立命館大学）

〇2023 年度秋季研究発表会は不開催。総会は 10 月 15 日（日）に京都府立大学で開催予定。

〇学会誌『Germanistik Kyoto』について

2000 年より年 1 回刊行。2023 年 9 月頃に第 24 号刊行予定。

〇2023 年度支部役員

支部長：青地 伯水（京都府立大学）

支部選出理事：河﨑 靖（京都大学）

編集委員：小林 哲也（京都大学），吉田 孝夫（奈良女子大学）

渉外・広報委員：菅 利恵（京都大学），大喜 祐太（近畿大学）

会計委員：熊谷 哲哉（近畿大学）

庶務委員：谷口 栄一（大阪府立大学），田原 憲和（立命館大学）

〇会員数：141 名（2022 年 8 月 21 日現在）

阪神支部

〇2023 年 3 月 21 日，講演会（於：関西学院大学梅田キャンパス）

参加人数：4 名

講演：Sandra Ballweg 教授（パーダーボルン大学）：Multimodale und mehrsprachige Chatkommunikation in virtuellen Austauschbegegnungen

○2023 年 3 月 25 日，機関誌『ドイツ文学論攷』第 64 号発行。下記の論文，書評を掲載。
論文
1) 北岡志織：挑発する難民―ハンブルク・ドイツ劇場『夢の船』と公共劇場による自己批判
2）小西優貴：ドイツの小学校ドイツ語科教科書 der die das の分析―移民に基づく社会の多言語性と人々の出自言語（使用）の描写
書評
1）大宮勘一郎・田中 愼（編）：シリーズ　ドイツ語が拓く地平 3 『ノモスとしての言語』　（阿部美規）

○2023 年 4 月 8 日，阪神ドイツ文学会第 73 回総会・第 240 回研究発表会（於：大阪大学）
参加人数：38 名
総会
1) 幹事諸報告：庶務，会計，編集，企画，渉外，支部選出理事
2) 審議：2023 年度予算
3) 役員選挙：会長選挙，幹事選挙
4）意見交換

研究発表会
1) 山取圭澄（京都産業大学）：読者を誘う思考の散歩道―レッシング『ラオコオン』の構成に関する考察
2) 壽健太（関西学院大学博士後期課程）：hergehen/hinkommen を巡る一考察―なぜこれらの組み合わせが可能なのか？

○2023 年 7 月 16 日，阪神ドイツ文学会第 241 回研究発表会（zoom によるオンライン開催）
参加人数：　39 名
研究発表会
1) 児玉麻美（奈良女子大学）：ユーモラスな二重悲劇―歴史劇『ハンニバル』とグラッベの演劇論について
2) 信國萌（大阪公立大学）：ドイツ語形容詞と，形容詞が項に取る事象について
講演会
Helmut J. Schneider 教授（ボン大学名誉教授）: Aufbruch ins Freie. Zur poetischen Landschaftserfahrung zwischen europäischer Aufklärung und Romantik

○第 242 回研究発表会：2023 年 12 月 9 日，近畿大学にて開催予定。

〇2023-2024 年度役員名簿
会長（支部長）：髙井絹子（大阪公立大学）
庶務：信國萌（大阪公立大学），香月恵里（岡山商科大学）
会計：児玉麻美（奈良女子大学），吉村淳一（滋賀県立大学）
企画：小川敦（大阪大学），北岡志織（大阪大学）
渉外：柏木貴久子（関西大学），村山功光（関西学院大学）
編集：千田まや（和歌山大学），細川裕史（阪南大学），中村綾乃（大阪大学）
幹事外編集委員：西出佳詩子（大阪大学），林英哉（三重大学），熊谷哲哉（近畿大学）
支部選出理事：孟真理（神戸女学院大学）

〇会員数：202 名（2023 年 7 月 31 日現在）

中国四国支部
〇中国四国支部会は 2022 年度の活動として，10 月 29 日に岡山大学にて，第 71 回総会・研究発表会を催し，以下の 4 件の研究発表があった。

小林 英起子：啓蒙喜劇における変装と策略の作劇法――ゴットシェート夫人とレッシングの喜劇を例に
金関 猛：『婚約書簡』に見るユダヤ人フロイト
川野 正嗣：加速する世界の中の個人――E・ユンガーとベンヤミンの紀行文における詩人像
Anette Schilling：Mehrdeutigkeiten im Text als Einstieg zum literarischen Verstehen. Vorschläge zur Textarbeit mit Wolfgang Borcherts Kurzgeschichte „Das Brot“

〇『ドイツ文学論集』は，以下の査読論文を掲載して，10 月に発行した。

Hiroshi Matsuo：Die Ikarus-Gedichte von George und Baudelaire
橋本 紘樹：ハーバーマスとゲーレンの対峙，初期ドイツ連邦共和国における民主主義的発展と「制度」の問題――憲法パトリオティズムの前史として

西日本支部
〇2023 年 12 月 9 日（土）・10 日（日）西日本支部第 75 回総会ならびに研究発表会を福岡大学にて開催予定。

〇機関誌『西日本ドイツ文学』第 35 号の編集作業が進行中。（今秋発行予定）

〇インターウニ西日本は今年度も中止。

〇第 6 回九州ドイツ語スピーチコンテスト 2023 協賛。
（2023 年 6 月 10 日（土）福岡大学にて対面開催）

〇会員数（2023 年 7 月 18 日現在）：142 名

ドイツ語教育部会報告

1. 総会

2023 年日本独文学会春季研究発表会（会場：明治大学）に合わせ，2023 年 6 月 3 日（土）にドイツ語教育部会 2023 年度総会が開催された。議題は以下の通りである。

I　報告事項
　1.　2022 年度活動報告
　2.　新部会長の挨拶と活動方針
　3.　その他
II　審議事項
　1.　2022 年度決算報告
　2.　2023 年度予算について
　3.　監事嘱任について
　4.　その他
III　会員からの意見開陳

「II 審議事項」の「2.　2023 年度予算について」は，原案通り承認された。また，「3. 監事嘱任について」では，2022 年度の監事 2 名（吉満たか子氏，林良子氏）のうち吉満たか子氏の任期が満了となったため，2023-2024 年度幹事として田原憲和氏が推薦され，承認された。

2. 分掌ごとの活動報告

(1) 部会長

太田達也部会長が行った活動は，以下の通り。

1) 第 24 回 Vertreter:innenversammlung des IDV に柴田育子幹事とともに参加した（2022 年 8 月 14 日と 20 日）。会議では，入会審査や活動報告などが行われた。
2) Internationale Deutschlehrertagung (IDT) 会期中の 2022 年 8 月 18 日に実施された Verbandspräsentation にて，柴田育子幹事，能登慶和幹事，鈴木友美加会員とともに，当部会の活動を紹介するポスターの掲示および機関誌『ドイツ語教育』の展示を行った。
3) 2022 年 9 月 24 日に開催された Goethe-Institut Tokyo 主催の専門家会議「ドイツ語教育の未来を拓くー持続可能なドイツ語教育に向けて」において，「これからのドイツ語教師に求められるものー教職課程ドイツ語科指導法科目の現状と課題ー」と題し，基調講演を行った。

(2) 編集委員会

機関誌『ドイツ語教育』第 27 号を 2023 年 3 月 20 日に発行した（編集長：鷲巣由美子幹事)。第 27 号では特集「CEFR と CEFR 補遺版」が組まれ，1 本の論考が掲載された。また，編集委員会が定めるテーマについての意見を募るフォーラムのカテゴリーは，「協働学習」をテーマとし，3 名からの投稿があった。論文が 2 本，研究ノートが 3 本，実践報告が 2 本，開催報告が 1 本掲載された。

(3) 企画委員会

1) 2022 年 5 月 7 日(土)に Zoom にて教育部会主催講演会(16:40～18:10)を開催した。
講演者: 真嶋潤子氏（大阪大学名誉教授，ケルン大学客員研究員）
講演題目:「日本の外国語教育への「CEFR-CV(CEFR 補遺版)」のインパクト」
2) 2022 年 10 月 29 日(土)13:00～16:00 に Zoom にて，第 2 回アイディア賞コンテストを開催した。中京大学，名古屋大学，南山大学，立教大学から計 7 チームが出場した。
3) 2022 年 12 月 3 日(土)13:00～16:00 に Zoom にてワークショップを開催した。
講師: Lars Bauer 氏（東洋大学）
テーマ: Vorstellung, Vergleich und Verwendung von algorithmusbasierten (SRS) Vokabellernapps
4) 2023 年 3 月 13 日(月)に JaF-DaF Forum 実行委員会が主催者，そして本部会が共催者となり，第 10 回 JaF-DaF フォーラムを開催した。

(4) 高等学校・PASCH 担当委員会

1) 2022 年 6 月 12 日に，ゲーテ・インスティトゥート東京にて国際ドイツ語オリンピック参加者および PASCH の Jugendkurs 参加者向けのオリエンテーションが実施され，出場生徒および高等学校教員が参加した。
2) 2022 年 7 月 17 日(オンライン)，18 日(ゲーテ・インスティトゥート東京にて対面)に，PASCH の Instagram ワークショップが開催され，生徒や教員が多数参加した。
3) 2022 年 7 月 25 日から 8 月 5 日まで，第 12 回国際ドイツ語オリンピックがハンブルクで開催された。日本からは 1 名の高校生が参加し，引率教員として高独研（高等学校ドイツ語教育研究会）から出縄祐介氏（部会員）が同行した。
4) 2022 年 10 月 30 日に，獨協大学にて「第 24 回全国高校生ドイツ語スピーチコンテスト」が開催され，高独研の池谷尚美氏（部会員）が審査員を務めた。
5) 2022 年 12 月 22 日に，PASCH の企画として「Lehrmaterial HUEBER: „Beste

Freunde“ und „Dabei“」というテーマで Zoom によるウェビナーを開催した。

(5) 大学入試問題検討委員会

1) 独立行政法人大学入試センターからの依頼に基づき，大学入試問題検討委員会は，「令和 5 年度大学入学共通テスト（ドイツ語）の試験問題に関する意見・評価」（本試験および追試験；以下，「当該評価書」という）を太田達也部会長の名義で作成し，2023 年 2 月 28 日付けで大学入試センターに提出した。評価書の作成は，太田達也部会長のほか，野村幸宏幹事，田中雅敏幹事，牛山さおり部会員，吉村暁子部会員の各委員が担当した。

　なお，当該評価書ならびに問題作成部会の見解は，
https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/hyouka/
で公開されている。

2) 2022 年度日本独文学会春季研究発表会 1 日目と 2 日目に予定していた 2022 年度大学入試問題の展示は，展示会場の感染リスク回避等の対策が困難であると判断し，中止とした。

会員数(2023 年 6 月 1 日現在)は，正会員 411 名，準会員 70 名，賛助会員 9 団体の計 490 名・団体である。

（文責：田中雅敏）

2023 年度岩﨑奨学金（出版助成）について

2020 年度に岩﨑奨学金は，若手研究者のための出版助成に改定されました。2023 年度は，申し込みがありませんでした。

なお，岩﨑奨学金（出版助成）の概要は，下記のとおりです。

【奨学金の趣旨】
日本独文学会は，故岩﨑英二郎先生のご遺族からいただいた寄付金で「日本独文学会岩﨑奨学金」を創設し，若手研究者の育成のために国際学会の発表に対しての奨学金を支給してきましたが，必要とされている援助を行うという観点から，この度より若手研究者の研究成果公開のための奨学金制度へと改定することになりました。

【奨学金の概要】
1. 博士論文の出版に際して，テニュア職を持たない会員に対して，30 万円を上限に出版費用の助成を行う。
2. 奨学金の支給は年度総額の上限を設定する（2020 年度については 60 万円）。また，同一会員への支給は 1 回のみとする。
3. 募集は年度毎に行い，日本独文学会ホームページその他の手段で会員に広く公示する。
4. 奨学金は 2020 年 4 月より募集を開始する。
5. 奨学金の返済の義務はない。ただし，支給後に，申請対象の研究書の出版を中止した場合，受け取った奨学金を返還するものとする。
6. 他の出版助成を受けることは可能であるが，本奨学金と合わせて出版費用を超えないこと。
7. 奨学金を受けようとする者は，決められた書式の申請書類を日本独文学会事務局に提出する。
8. 審査は日本独文学会常任理事会内に設けた審査委員会が行う。審査委員会は，外部の専門家に審査を依頼することができる。審査の結果適当と認めた場合，奨学金を支給する。
9. 奨学金の原資を使い切った時点でこの事業を終了する。また，事情により，予告なしにこの事業を終了することもある。

【募集人数】
各年度 2 件〜3 件程度。

【応募資格】　以下の条件をすべて満たす者。

1. 日本独文学会員。
2. テニュア職を持たない者。

【応募方法】

1. 下記の必要書類を日本独文学会事務局へ郵送する。a）と b）に関しては同時にファイルを電子メールで hojo@jgg.jp 宛に送付する。
2. 応募締め切り：毎年 6 月 30 日
   a) 奨学金申請書（3 種類），書式（3）
   b) 原稿
   c) 誓約書
   d) 博士論文の審査に合格したことを証明する文書

【選考方法】

1. 提出された申請書を日本独文学会常任理事会で審査する。
2. 必要に応じて，審査委員会外の専門家に審査を依頼することがある。
3. 申請から 3 ヶ月程度で申請者に採否を通知する。

大学院 Germanistik 関係博士論文題目

2023 年 4 月 30 日から 2023 年 8 月 31 日までに本学会 HP の「博士学位取得情報登録フォーム」（https://www.jgg.jp/mailform/dsrtn/）に届け出があった情報を，執筆者ご本人の申告に基づき掲載します。

なお，申告済みの情報は下記 URL でご覧いただけます（検索欄への入力無しに「送信する」をクリックすると，全件表示されます）。
https://www.jgg.jp/mailform/prom/prom_src.php

※大学名および氏名は 50 音順です。
※掲載対象は本学会員の情報のみです。
※カッコ内は取得年を表します。

京都大学大学院文学研究科
土谷真理子：ドイツ語圏近代における自然詩の展開とスイス
(2022)

あとがき

「ニュースレター」2023 年秋号（Info-Blatt Herbst 2023）をお届けします。各種のご報告ならびにご案内をお寄せいただいた皆様，ありがとうございました。

日本独文学会には大学院生の頃からお世話になっておりますが，今回，理事として初めて「ニュースレター」の編集に携わる機会を得ました。あらためて学会の守備範囲の広さに驚かされています。目下，学会の規模は縮小傾向にありますが，小黒新会長の元，逆転の発想をモットーに，皆様と知恵を絞っていければ幸いです。

引き続き，学会内での情報共有に向けてご協力いただければ幸いです。どうぞよろしくお願いします。

庶務担当理事　小林和貴子

編集
一般社団法人 日本独文学会庶務委員会
　小黒 康正（委員長）
　太田 達也（編集担当）小野間 亮子（編集担当）川島 建太郎（編集担当）
　小林 和貴子（編集担当）櫻井 麻美（編集担当）清野 智昭（編集担当）

編集・発行
一般社団法人　日本独文学会
170–0005 東京都豊島区南大塚
3–34–6 南大塚エースビル603
電話03–5950–1147
振替00160–9–135018
E-Mail（メールフォーム）：
http://www.jgg.jp/mailform/buero/

ニュースレター2023 年秋号
JGG-Info-Blatt / Herbst 2023
2023 年 9 月 11 日発行